
ALONES

旅がらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ALONES

【Nコード】

N3996E

【作者名】

旅がらす

【あらすじ】

『超能力者』 それは、『人の進化系』か、『畏怖すべき化物』か……。そんな『力』を持つ少年、イツキは、公園で銃器を持った男に追われる少女 レンと出会う。同じ『孤独』を持つ二人の出会い、それは、長い長い戦いの始まりでもあった……。

1 - 1 It s u k i 邂逅(前) (前書き)

一人称から三人称に修正しました。

最初の一文の語り部が誰なのか、それはまた後ほどということである
笑)

1 - 1 It s u k i 邂逅（前）

もしも、時間を巻き戻すことが出来たとしても、貴方は彼女と歩く道を選ぶのだろうか。

たとえ、それがどれだけ辛く苦しい道のりだとしても。

貴方は再び、彼女に手を差し伸べるのだろうか。

「青いなあ……空」

清々しい春の陽気が差し込むお昼時、五十嵐いからしイツキは、丘の上にある公園に来ていた。ベンチに横になって空を見上げる。イツキの少ない趣味の一つだ。

空は相変わらず青い。イツキの一番好きな少し薄めの、青だった。「晴れてるなあ……」

イツキ晴れが好きだ。そして、雨は嫌いだ。雨は嫌なことを思い出す。

黄色のレインコート

横断歩道

信号無視のトラック

近づく二つ

女性の叫び声……。

「……………!!」
イツキはハツとなって思わず起き上がった。嫌な汗が体中を這い回っている。

イツキは額の汗を拭った。思い出す必要はない。そう自分に言い聞かせた。

気晴らしに、イツキはベンチの下に置いてあるスケボーを転がした。スケボーは地面をゆっくりと前進する。イツキはスケボーに全神経を集中させる。

(飛べ……………!)

すると、スケボーは誰も乗っていないにも関わらず、突然猛スピードで走り出し、宙に浮かんだ。さらに、イツキが『宙返りをしろ』と心で念じると、スケボーはその通りにその場で軽やかに宙返りをする。

この力は、『テレキネシス遠隔念動力』と言う。
俗に言う、超能力。

近年、イツキのような力を持つ人間、『エスパー超能力者』が増えている。原因は不明。分かっているのは、それを先天的に持つ者と、後天的に事故とか何かの拍子で目覚めさせる者の二種類の『能力者』がいるということだけだ。

ちなみに、イツキは後者である。

もちろん、超能力者は以前から存在していた。ただ、その数はとても少なく、十万人に一人いるかいないか、くらいの割合だったそう
うだ。

それが、二十年ほど前から急増し始めた。現在では、百人に一人の割合で、超能力者は存在する。という研究発表まで出ているそう
だ。

『超能力者』は、普通の人間が使わずに眠らせている脳の機能を使えるようになった、いわゆる『人類の進化系』だと論じる科学者もいるが、それが本当なのかは定かではない。

だが、『超能力者』は、自身の能力を使えば使うだけ、脳に負担を与えると、共通点を持ち、更に、実際に能力を使いすぎて脳内出血を起こして死亡した事例も存在するため、現在はその説が最も有力な説となっている。

そして、人々は『超能力者』を恐れ、蔑んだ。

世界と言うのは、常に優良なものには厳しくできている。

『超能力者』は『人類の進化系』でありながら、同時に『畏怖すべき化け物』でもあったのだ。

「……………あれ？」

突然、スケボーが動かなくなった。能力を解除した覚えはない。

試しに、スケボーに『動け』と念じてみたが、スケボーはうんともすんとも言わなかった。

(能力が、使えない……………?)

ますますおかしくなった。『この場所』でこんなことは、本来あり得ないはずだ。試しにもう一度やってみたが、結果は同じだった。

「いったいどうなってるんだ……………?」

突然のことに首を傾げながら、イツキは起き上がってスケボーを拾い上げた。見たところ、異常はない。ただ、能力だけは使えなくなっていた。

「……………ん、霧……………?」

そこでようやく、イツキは周囲につつすらと霧のようなものがかかっていることに気がついた。

しかし、今日はポカポカとした気持ちの良い春の陽気のはずだ。陽炎が立つほど暑くはないし、ましてや霧が立ち込めるほど湿つてもない。

（つつーことは、この霧が原因か……？ でも、こんな能力は見たことないぞ……）

イツキは、現在までに判明している能力をできるだけ思い出して見たが、自分を取り巻く霧と結びつくものは一つもなかった。

（催眠能力ヒュプノシスに似てはいるけど、違うな……。とりあえず、ここから出るか……）

原因が分からず、それ以外の対処法を思いつかなかったイツキは、小さくため息をついて公園の出口に向かって歩き出そうとした。

その時、

「きゃあっ！」

「うわあっ！」

突然、後ろから何かがぶつかってきた。驚いて後ろを振り向くと、のっぼさんのような白い帽子を目深に被った子供 声からして、おそらく女の子 が、尻もちをついていた。

「おい、大丈夫か？」

痛そうにしている女の子に、イツキは手を差し出した。すると、女の子はイツキの手を見るなり、びくんつ。と大きく震え、素早く後ずさった。気のせいか、一瞬だけ霧が濃くなったように思えた。さすがに様子が変わったと思ったイツキは、手を差し出したまま、しやがんで彼女と視線を合わせた。

「別に捕って食ったりはしないって。一人で立てるか？」

なるべく優しい声で話しかけると、女の子はしばらくこちらを品定めするように こちらから彼女の目は見えなかったが 見たあと、小さくコクリと頷き、立ち上がった。

改めて女の子を見ると、かなり酷い身なりをしていた。

着ている服は所々破れており、靴も傷だらけでボロボロ。手のひらや膝小僧にもたくさん傷が……。

「つて、傷！」

イツキが手を取ると、女の子は再び大きく震えた。また、一瞬だけ霧が濃くなる。

しかし、今はそんなことに構ってなどいられなかった。

イツキは彼女の手を引いて、水場に向かった。手を丁寧に洗わせ、特に傷の多い右手にハンカチを巻く。

女の子は面食らったように、ポカンと口を開け、ハンカチをジッと見つめていた。

霧は、いつの間にか消えていた。

「消毒もちゃんとしないと。結構酷いし、包帯もした方がいいか……？」

もしそうするのならば、家に行く必要があった。さすがにそこまでは用意していない。

「……！！！」

イツキがぶつぶつと独り言を言っていると、女の子は突然びくびくと震えだした。のっぽさん帽子を更に深く被るようにして俯く。

「ん、どうした？」

尋ねたが、彼女は何も言わずに震えていた。

同時に、消え去っていたはずの霧が再び吹き出し始めた。まるで、彼女の震えに呼応しているようだ。

（やっぱり、この子が……）

どうやら、イツキと彼女は『同類』のようだ。

女の子は、突然出口とは逆方向に走り出した。

「あ、ちよっと待った！」

イツキはスケボーを抱え直すと、女の子を追いかけた。

1 - 1 Itsuki 邂逅(前) (後書き)

はじめての超能力ものです。

超能力について調べてみたらいろいろあってびっくりしました。

感想&アドバイス、お待ちしております><

1 - 2 Ren 邂逅（後）

レンはこのとき、もう無我夢中だった。

黒ずくめの連中に追われるようになってから、どのくらい走ったのだろう。生まれ育った街を出てからどれほどの時間が経ったかも覚えていない。ほんの数日間のような気もするし、数ヶ月も経ったような気もする。

どちらにしろ、もう限界だった。

逃げる為に使った能力は、確実に十二歳の少女の体を蝕んでいた。足はもうフラフラで、力もろくに入らなかった。捕まるのも時間の問題だろう。

（……でも……）

レンはズボンのポケットに入っている棒切れを掴んだ。捕まったら首を刺して死のう。レンはそう決めていた。

レンの『力』は危険だ。そして、黒ずくめたちは『力』を何かるくでもないことに使おうとしている。

（あんな想い、もうたくさん……！！）

黒ずくめがレンの『力』を手に入れるためにしたことが、レンの脳裏に強く焼きついていた。

あんな非人道的なことをする奴らに、ついていくことなどレンにはできなかった。

「くあつ……………！！」

頭の奥に鈍痛が走り、足がもつれる。転びそうになるのをどうにか耐えて、レンは再び走り出した。

（そういえば、お礼、言えなかったなあ……………）

右手に巻かれたハンカチを見て、先ほどのことを思い出す。

自分の傷だらけの手を見て、簡単な応急処置を施してくれた男の人。久しぶりに誰かと触れ合ったような気がした。

（あの人は、私の『力』を知っても、またあのように私に接してく

れるだろうか?)

そんな疑問が脳裏をよぎり、すぐに自分で否定する。

(いや、無理だ。私の『力』を見れば、どんな人間だって……………)

「おっす」

「……………って、ひゃあっ!？」

突然、先ほどまでレンの思考の中にいたはずの彼が、レンの隣を走っていた。いや、どちらかというとジヨギングレベルである。私はこんなに遅かったのか。と、レンは軽いショックを覚えた。

が、すぐに、彼が自分を追ってきたことに疑問を抱く。

「……………なんで？」

「あー、そっちに行くと、行き止まりだぞ。出口は逆方向だ」

しかし、レンの疑問をよそに、彼は急いでまくしたてるように言った。

そこで、レンの思考が一瞬停止する。

(……………って、行き止まり!?)

何てことだ。これでは完全に捕まってしまう。レンの全身に嫌な汗が流れた。

しかし、今日一番の失態に焦るレンの横で、彼はとてもものんびりとした口調でレンに話しかけてきた。

「あんだ、逃げてんのか？」

「……………」

彼の質問に、レンは答えなかった。

しかし、彼は小さく肩をすくめただけで、すぐに言葉が続けた。

「……………まあ、いつか。じゃあ、も一つ質問な」

「……………」

「あんだ、能力者？」

「っ!？」

「やっぱな」

彼はレンの反応を肯定と捉えたらしい。これは非常にまずい状況

だった。

一体、自分の目の前にいるこの人は何者なのだろう。黒づくめの奴らの中にはこんな人はいなかったと思う。では、新たな刺客だろうか。

そんな考えを頭の中で巡らせていると、彼は予想外の言葉をレンに言った。

「手、貸そうか？」

「……え？」

一瞬、レンは彼が何と言っているのか皆目見当もつかなかった。手を貸す？ 彼は敵ではないということか？

戸惑う私をよそに、彼は言葉を続けた。

「あんたは能力者で誰かに狙われている。それでもって逃げてきたはいいけど、土地勘がなくて今んとこ大ピンチ。って感じなんだろう？」

「……」

大当たりだった。生まれ育った街をこれまで出たことのなかったレンにとって、ここは全く知らない場所である。とにかく逃げることしか頭になかったせいで、この有様だ。これ以上一人で逃げることは不可能だろう。

彼の申し出はとても有り難かった。しかし、レンは見ず知らずの彼を信じることができない。

「………なんで？」

「ん？」

「なんで、そんなことするの？」

今まで逃げた場所では、こんなことは一度もなかった。全員、レンが能力者だと知ると近づこうともしなかった。誰も、手など差し伸べてはくれなかった。

すると、彼は本日二回目の予想外な言葉を口に出した。

「俺も能力者だから」

「……！？」

「俺もさ、逃げたことがあるんだ。能力者になってすぐに」
驚いた。彼とレンは同類だったのだ。

そして、彼も自分と同じような経験をしている。

「で、どうする？ 俺の手を取るか？」

「……………」

「決めるのはあんた自身だ。生きて人生を謳歌するか、それとも捕まって利用されるか」

「……………」

彼はそう言っつてレンに手を差し伸べてきた。けど、レンはその手を取るべきかまだ迷っていた。

ここで手を取れば、レンは死なず、奴らから逃げることもできるかもしれない。けれどもそれは、目の前にいる彼を巻き込むことにもなるのだ。

奴らが諦めない限り、レンの逃避行はいつまでも続く。

でも、レンはゆっくりと頷いた。

「……………お願い、します」

迷っている暇はなかった。レンは奴らに利用されるのは真っ平だった。本音を言えば、死にたくもなかった。

レンが彼の手を取ると、彼はにっこりと笑った。

「了解！ 俺、五十嵐イツキ。よろしくな」

「……………小檜山、レン……………」

これが、いっちゃん 五十嵐いかりイツキと、彼女 レンちゃんの出逢いだ。このときの彼は、この出逢いが彼と、そして私たちの運

命を大きく変えようとしていることなど、知る由もなかった。

1 - 3 It s u k i 逃走

彼女 レンは、イツキの手を取った。決まりだ。レンは自分のことを信じてくれるようだ。

イツキは早速、レンに能力解除を頼んだ。

「じゃあ、早速だけど、レンの霧、解除してくんねえ？ このままじゃ、俺も力を出せない」

「……………」

しかし、レンは能力の解除を渋った。後ろをちらちらと伺いながら、「でも……………」と呟く。

だが、二人に迷っている時間など無かった。

「つと、行き止まりか……………」

「あ……………」

イツキとレンは公園の中でも、最も見晴らしの良い小高い場所に行き着いた。柵の向こうは、少し切り立った崖のようになっていて、それを見て、レンは言葉を失っていた。今までで一番震えが大きくなり、それに共鳴するように霧の量も一気に増える。

イツキはレンにもう一度頼んだ。

「……………レン、頼む」

「……………」

「レン！」

レンの震えが、小さくなった。ゆっくりと一歩柵に近づく。霧も先程より薄くなっていた。

前を向いたまま、レンは小さな声でイツキに話しかけてきた。

「イツキさん……………」

「イツキ、で構わない」

「……イツキ……逃げれる？」

「ああ」

「どこまでも？」

「逃げれるさ。俺を信じろ」

「……」

「生きたいんだろ？」

「……！！」

イツキの最後の言葉を聞いて、レンは一瞬だけ息を呑み、それから意を決したような顔でこちらを振り向いた。

今度は、レンから手が差し伸べられる。

「生きたい……！！」

霧が、消えた。

イツキは、スケボーを地面に置いて、レンの手をギュッと握る。

「決まりだな」

イツキがそう言うと、レンははじめて笑みを見せた。イツキの手を、弱い力で、それでも強く握り返す。

だが、イツキたちに安心している時間など、許されなかった。

「見つけたぞ！」

「……！！」

後ろから突然、男の声が聞こえてきた。

振り向くと、何人もの黒づくめの人間が、二人を取り囲んでいる。中には、銃器を所持しているものもいた。

イツキとレンは後ろにズルズルと引き下がる。背中に柵のあたる感触がした。

もう、逃げ場は無い。

「ずいぶんと長い鬼ごっこになったが、ここでゲームオーバーだな」
黒ずくめの一人が、笑うように口を歪ませた。その目は一瞬だけ
イツキを見て、再びレンに戻る。

「これはこれは、姫は騎士ナイトでも見つけたのかな？ それで俺たちか
ら本当に逃げられるとお思いで？」

レンは、せせら笑う黒ずくめをキツと睨んだ。

「あんたらなんか捕まんないんだから！」

「ほお、言うようになったじゃないか、お嬢ちゃん。でも、いくら
君でもこの数には勝てないんじゃないかい？」

リーダーらしき黒ずくめが右手を上げると、それを合図にしたよ
うに銃器を持つ黒ずくめたちが、こちらに照準を合わせてきた。リ
ーダーも懐からピストルを取り出す。

イツキは小声でレンに話しかける。

「レン、お前、絶叫マシンはダメなタイプか？」

イツキの場違いな質問に、レンは呆れたような声を出した。

「は？ 今はそんな話……」

「いいから答えるよ」

「……ちよっと苦手なくらい。乗れないほどじゃない」

「よし。じゃあ、俺が合図を出したら、そのとおりにしろ……」

「こそこそ何を話している！」

リーダーがイツキたちを睨みつけながら大声を出す。ピストルの
照準が、レンからイツキに移った。

イツキは柵に手をかけ、意識を集中させた。狙いは二人を囲む、
黒ずくめだ。

「こつこつこつことだ！」

イツキが叫んだ瞬間、地面の砂が、一気に嵐のように舞い上がっ

た。

彼が持つもう一つ的能力、『サイコキネシス念動力』だ。物理的エネルギーを起こして、外界に干渉する力。それにより、静かな公園に強い砂嵐が巻き起こり、黒づくめたちの視界を奪う。

「な、こいつも能力者か!？」

リーダーの男が驚いて後ずさる。だが、そんなことに構ってなどいられない。

イツキはレンの手を握り返した。

「飛ぶぞ、レン!」

「うん!」

二人はそのまま、柵を飛び越えた。そのまま、重力に従って僕らは落下していく。落下した直後、何発か銃声が響いた。

イツキはレンの頭を抱え、今度は上に置いてきたスケボーに意識を集中させた。

(来い……!)

しかし、スケボーはなかなかやって来ない。如何せん、思った以上に距離が離れてしまったらしい。少しずつ、地面が近くなっている。

それでも、イツキは諦めずに呼びかけ続けた。

(来るんだ……!!)

再び強く念じる。地面まで、あと数メートルも無かった。

ぶつかるともしれない。一瞬だけ、不安が脳裏をよぎった次の瞬間だった。

ギョーンッ！

猛スピードで上から何か落ちてきたと思った次の瞬間、二人は空を飛んでいた。

「うー、危機一髪だったな」

そう言うイツキの右手は、ようやくやってきたスケボーをしつかりと掴んでいた。スケボーが空中をすべるように走る。

レンは、イツキにしっかりと捕まりながら、スケボーを見つめていた。

サイコキネシス テレキネシス
「念動力と遠隔念動力……、それがあなたの力？」

「そ。まあ、なんでか遠隔念動力の方はコイツにしか使えないから、ちよつと使いづらんだけどな」

そう、イツキは遠隔念動力をこのスケボー以外に使うことができない。今まで何度か試してはみたが、すべて駄目だったのだ。

その理由は、当の本人にすら分かっていない。

「さてと、この辺りかな」

しばらく飛んだあと、イツキは目的地のすぐ傍で能力を解除した。そこは、閑静な住宅街だった。何軒か家が立ち並んでいる。

イツキはレンの手を引き、二、三分ほど歩いて、薄緑色をした壁の家の前に立ち止まった。

レンが家を見上げ、イツキに尋ねてくる。

「あの、ここは……？」

「俺の住んでるところ。まあ、俺は居候だけど」

「居候？」

イツキの言葉に、レンは首を傾げた。

「イツキって、何歳なの？」

「今年で十六」

「……家族は？」

「いない。でも、まあ、こここの連中もある意味『家族』なのかな？」

「……？」

再び、レンが首を傾げる。イツキは笑ってごまかした。

「とりあえず、ケガの手当てするぞ」

そう言っつてレンの手を引っ張ったが、レンはなかなか動こうとしなかった。しきりに、二人が先程までいた公園の方向を見ている。

レンは不安そうな表情で、イツキを見上げた。

「追って来ない……？」

「追っつてこれはしても、あんな物騒なものもう出せないし、俺たちに危害を加えることもできねえよ」

「……」

イツキの説明に、レンは腑に落ちないとも言いたげな表情をしていた。

どうやら、この町の『ルール』を知らないらしい。

「じゃあ、そのことを説明するっつても含めて、中に入るぞ」

「……うん」

まだ納得の行っていない表情のレンの手を引いて、イツキは家のドアを開けた。

1 - 4 R e n ホットドッグ(前書き)

主要登場人物が揃ってきました。

1 - 4 Ren ホットドッグ

「ESP特区？」

レンは、イツキが入れてくれたホットココアを飲みながら、イツキの言葉を反芻した。その両手と両膝の傷は既にイツキによって手当てされている。

レンは空色のパーカーと白の短パンに着替えていた。イツキの昔の洋服だそう。着心地は抜群によく、丁寧に保管されていたことがよくわかる。

「そ。正式名称は『超能力者特別管理区』っていうんだ。この町は『超能力者支援事務局』って国家机关のお膝元でさ、『超能力者の管理および社会への導入』を図るために、いろいろと超能力者にとって都合のいい『ルール』が他の町よりも充実してるんだ」

「それが、私が捕まらない理由？」

「まあな。ここでは能力者に危害を与えることは、自己防衛以外では全面的に禁止されているし、危害を加え次第、加害者は即逮捕。って寸法になってる」

そう言いながら、イツキは慣れた手つきでソーセージをフライパンで焼いている。家に入っただけにお腹の虫が鳴いたレンのために、簡単な食事を作っているのだ。

イツキのその言葉を聞いて、レンはようやく納得することができた。レンが能力者であることは、イツキが重要な証人になってくれる。

たとえ奴らが襲ってきても、レンは自分の身の安全を国によって守られるのだ。

「納得したか？」

「……うん」

「そっか。……よし、できあがりだ」

話が終わると同時に、食事の用意も終わったようだ。ソーセー

ジの美味しそうな匂いが、レンの鼻をくすぐる。

イツキは、レンの前にできたてのホットドッグを置いた。ソーセージだけじゃなく、レタスやベーコン、それにスクランブルエッグまで入っている。ポリウム満点だ。

それを見た瞬間、レンのお腹は一層大きな鳴き声を上げた。一気に恥ずかしくなる。

イツキはそれを聞いて小さく笑った。

「よっぽど腹が空いてたんだな」

全くもって、その通りであった。ここ数日、ろくに食べていなかったことを、今更思い出す。

ここまで来れたのは、奇跡に近いのかもしれない。

空腹感に耐えきれず、挨拶もそこにレンはホットドッグにかぶりついた。

「喉に詰まらすなよ」

イツキの言葉も、今は耳に入らなかった。ただただ夢中がかぶりつく。

「……………」

一口食べるごとに、レンはこれまでの日々を思い出していた。

それまでの生活が一変して、地獄に変わった。逃げている間は食事どころか寝る場所を確保することもままならず、コンビニのゴミを漁り、鉄橋の下でダンボールに身を包み、一夜を明かしたこともあった。

「……………うっ……………あぐうっ……………」

知らぬ間に、涙が溢れていた。ホットドッグにかぶりつきながら、大粒の涙を流すレンの隣で、イツキはただ何も言わずに座っている。

「……………うっ、ううう……………ぐうっ……………！」

（もう、逃げなくていいんだ……………）

そう思うだけで、涙が次々と流れてくる。

「う、ああ……………、うわああああああん！」

食べ終えるころには、嗚咽が大きな泣き声に変わっていた。

それから、どれだけ泣いたのかはつきりと覚えていない。でも、イツキは泣きじゃくるレンの隣に、ただ静かに座ってくれていた。

「ん……」

気づくと、レンはソファに横になっていた。どうやらあのまま眠ってしまったようだ。

イツキがかけてくれたらしく、レンの体はタオルケットに包まれていた。

「久しぶりだな……」

自然と、そう呟いていた。

こんなに安心した気持ちの目覚め方は本当に久しぶりだった。改めて、自分は助けられたのだと確信することができた。

「イツキ……？」

そこで、やっとイツキが傍に居ないことに気付いた。

急に不安になった。もしかしたら、これまでのことが夢だったのかもしれないと疑ってしまう。

だが、そんな不安はすぐに消去された。

「だーっ、別にいいだろ！ 誰にも迷惑かけてないんだしさ！」

「迷惑とかそういう問題じゃないよ！ いっちゃんはいつも変なことに首突っ込むし……、またそうなんじゃないかって考えたら、心配で……」

「ヒカルは心配しすぎなんだよ。俺は子供じゃねえ！ ってか、お前と同じ年だろうが！」

「十六歳は十分子供でしょ！」

ドアの向こうで、イツキが誰かと口論をしているのが聞こえてきた。安心すると同時に、もう一人の声の主　ヒカルと呼ばれた人が気になった。声からすると、女の人らしい。イツキの言っていた、『家族』の一人だろうか？

気になってドアを開けて向こう側を覗くと、玄関でイツキが女の人と口論をしていた。そして、その両隣で一組の男女が二人の口論を止めようとしている。

「まあまあ、ヒカルもそんなに怒るなって。な？」

「トウマくんは黙ってて！」

ヒカルと呼ばれた女の人を、トウマと呼ばれた金髪の男の人が宥めようとしていた。しかし、ヒカルは間髪入れずにトウマに言い返す。

「ヒカル。イツキだって確かに子供じゃないんだからさ。そこまで言わなくても……」

「キツカちゃんも口出ししないで！」

今度はキツカと呼ばれたボブヘアが印象的な女の人止めに入るが、やはり言い返されてしまった。二人とも、「だめだこりゃ」と肩をすくめている。

と、そこで、偶然こちらを向いたイツキと目が合ってしまった。

イツキはレンにつこりと笑って話しかけてくる。

「おっ、レン。よく眠れたか？」

「え？　あ、う、うん……」

頷きながら、レンはイツキと口論を繰り返していた相手　ヒカル　を見た。

ヒカルはセミロングの艶やかな黒髪が綺麗な人だった。来ている制服らしいブレザーも汚れ一つなく、手入れが行き届いている。

ヒカルと目が合った。びっくりした顔で、レンを見てくる。

「いつちゃん、この子は？」

「小檜山レン。今日、公園で会ったんだ」

「あ、えと、こんにちは……」

イツキに紹介されて、レンはペコリと頭を下げる。トウマとキツカがこちらに微笑みかけてくれた。

「公園つて、いつちゃんのお気に入りの？」

「そうだけど？」

「そこ、お昼ごろに銃声が鳴り響いたとかで今閉鎖されてるよ」

ヒカルさんの言葉に、レンは思わず萎縮してしまった。間違いない、あの時の銃声だ。

しかし、イツキは「あ、そうなの？」とか言つてとぼけている。白を切るつもりなのだろう。しかし、ヒカルは引き下がらない。

「まさかいつちゃん、そのとき公園にいたんじゃないの？」

「さあな」

「また変なことに首を突っ込んだんでしょ！」

大当たりだった。ヒカルの言っていることはきちんとの的を得ている。

しかし、イツキはとぼけたふり続ける。レンはどうすればよいか分からず、ヒカルとイツキを交互に見ることしかできなかった。しばらくして、ヒカルが小さくため息をつく。

「もう。ユウトくんには絶対に話すのに、私には話してくれないんだから」

「……………」

何を言っても返事をしようとしていないイツキに、ヒカルは少しさみしそうな表情を見せた。

「……………着替えてくる。……………あ、レンちゃんだっけ？」

「え、は、はい！」

突然話しかけられたので、思わず飛び上がってしまった。ヒカルはそんなレンを見て小さく笑う。

「大丈夫よ。あなたは居間でもう少しくつろいでてね」

そう言うと、ヒカルは階段を駆け上って行った。他の二人も、続いて階段を上っていく。

「……めんどくさいなあ」

小さくそうつ咳くイツキの横で、レンはこれから起ることになり、緊張と不安の入り混じった奇妙な感情を抱いていた。

1 - 5 H i k a r u 謎の能力(前書き)

第一話がこれにて終了です。

1 - 5 H i k a r u 謎の能力

イツキは、よく変なことに首を突っ込む。

駅前の地下街を縄張りにしていた不良グループの抗争に介入して、全員を更正させたり、浮浪者と仲良くなって彼の社会復帰に一役買ったたり、イツキはそういった問題にいちいち首を突っ込んで、たちまち解決してしまうのだ。

故に、彼の家族の一人 音無おとなしヒカルは常に心配ばかりしている。イツキは悩みを抱えている人間を瞬時に見分ける不思議な特技を持つている。そして、そうやって見分けた人々をなにがなんでも助けようとする優しさを持ち合わせていた。

優しいのは一向に構わない。だが、彼はそれ故に自分の危険を顧みることを決してしない。ヒカルはそれが心配だったのだ。

そして今日、彼女の心配は現実となった。

銃器を持った人たちに追われていた女の子を助けた。という、あまりにも非日常的な展開。

その上、助けた女の子 小檜山レンは、超エスパー能力者だと言うのだ。

「……………で、それで全部か？」

リビングでソファに腰掛けながらイツキに質問しているのは、この家の主、篠山しのやまユウトだ。端正な顔立ちで、黒のスーツがよく似合

う。

「ああ。そうだ」

「黒づくめの正体は？」

「いきなり銃を突きつけてきたんだぞ。分かるわけないって」

ユウトはイツキやヒカルよりも十歳上だが、イツキはまるで同い年のようにユウトと話している。尤も、この家の住人は、誰も彼に敬語を使わないのだが。

リビングには、家の住人が全員集合していた。ヒカルとその従兄である本条トウマほんじょうは、食卓に座ってイツキたちを見ており、ユウトの親戚に当たる篠山キツカは、キッチンで晩御飯の準備をしながら、イツキたちの話を聞いている。

ユウトはイツキと話し終わると、今度はイツキの隣に座るレンに視線を移した。

視線に怯えたのが、レンはビクンと体を震わせ、イツキの腕にギョツとしがみつく。それを見て、ヒカルは何故かムツとした。

(……なんか、ムカつく)

「レン、ユウトは悪い奴じゃないぞ」

イツキは怯えるレンに優しく話しかけるが、レンはユウトに対して警戒心を解こうとはしなかった。目深に被っているのっぽさんのような白い帽子の奥から、ユウトをじっと睨んでいる。

それを見て、ユウトは苦笑いをこぼした。

「嫌われたかな、オレ」

レンは少しの間、ユウトをじっと見つめていた。それから、ゆっくりとユウトの隣に座ると、彼の頬を触る。ユウトは何も言わずに、レンをじっと見つめた。

しばらくして、レンがユウトから手を離し、小さくお辞儀をした。

「……小檜山、レンです」

「ん。オレは篠山ユウト。よろしくね、レンちゃん」

その光景を見て、ヒカルは彼女の能力について、一つの確信を持った。

(この子、サイコメトラ精神感应能力者か……)

精神感应。

何かに触れることで触れた物体そのものや人物が経験したこと、感じていることを知る能力。おそらく、ユウトの“感情”を読み取ったのだろう。そして、彼に敵意が無いことを確認した。

「あら、私と同じ能力なのね、その子」

そう言いながらユウトの後ろに立ったのは、可愛らしいヒヨコのプリントの入ったエプロンをつけたキツカだ。

その手には、ピザや大皿に盛られたトマトのリゾットが乗っている。美味しそうな匂い。キツカの料理は本場仕込の天下一品だ。

「とりあえず、食べながら話さない？ その方がリラククスして話せるもの」

キツカちゃんは料理をいっちゃんとユウトくんの間にあるテーブルの上に並べていく。

「ヒカル。他の料理、持ってきてくれる？」

「あ、うん」

キツカに言われ、ヒカルは頭の中に三次元の立体映像を描き出した。

キッチンの料理や取り皿の位置を空間座標で指定して、さらに、そこからテーブルの座標を指定する。

(飛べ……！)

そう念じると、ユウトたちの目の前に、取り皿や他の料理が現れた。

これが、ヒカルを持つ能力の一つ、座標移動だ。アポート平たく言えば、物体転送。ヒカルのもう一つの能力である瞬間移動テレポートの発展型で、瞬間移動が『私自身もしくは私が触れているものを別の地点に移動させる』のならば、これは『座標 A にある物体を座標 B に移動させる』能力だ。

「よしっ、じゃあ食おうぜ！」

料理がそろったのを確認して、イツキの隣に戻ったレンの隣にトウマがドカツと豪快に床に座り、皆を見回した。音に驚いたのか、レンが再びイツキにしがみつく。

「あ、ごめんよレンちゃん。俺は本条トウマ。ちなみに能力は発火バイオ能力キネシスな」

トウマが豪快に笑いながら、レンに微笑みかける。レンはしばらくトウマをじっと見ていたが、またユウトと同じようにトウマの頬に触れ、イツキにしがみつく手を緩めた。

それを見計らって、キツカがユウトの隣に座り、ヒカルもトウマの向かい側にキノコ型の椅子を『座標移動』させて座った。

「よしっ、そんじゃ、食べるとしますか！」

トウマの元気な声で、私たちは食事を開始した。

「なるほど、君が能力を開花させたのはつい最近なんだね？」

「はい」

ユウトの言葉に、レンは静かに頷く。

ヒカルたちは食事をしながら話の続きをしていた。聞くと、レンは自身の能力に気づいて間もなく、黒ずくめの集団に狙われたらしい。

「そいつらの目的とかは聞かなかったのかい？」

「えっと、よく、覚えてないんですけど……『世界を我が手に』と
かって言っていました……」

「……世界を我が手に？」

「はい。その為に、私の『力』が必要だと……」

レンの言葉に、ユウトは小さく唸った。

超能力を悪用しようとする輩は少なくない。この間も、ヤクザの抗争に超能力者が介入して被害が大規模になってしまった事件が起きている。

超能力者の『力』というのは、それだけ危険なのだ。

ユウトが話を再開した。

「他には何か言ってなかったかい？」

「あ、えと、私の能力について、よく分からないことを……」
「分からないこと？」

そこで、皆が頭にクエスチョンマークを浮かべた。レンの能力は、さっき見せた精神感応だけではないというのか。

そこで、イツキが思い出したようにレン尋ねた。

「そういえば、公園で使ってた能力って何なんだ？」

「あ、あれは、『拒絶する霧』キャンセラー・ミストっていう催眠能力ヒュプノシスの応用で、霧の範囲内にいる人の五感を自分の支配下に置いて、自分が許可しないものを拒絶する能力……って、あいつらが言ってた」

それを聞いて、ユウトが会話に割り込んだ。

「奴らは君の能力を知っていたのかい？」

「はい。私が自分の能力を知る前から、私が能力者だって分かっていたみたいです」

「君が能力を開花させる前から？」

「はい。それで、『やっと見つけた』って……」

「やっと見つけた？」

ユウトの言葉に、レンはゆっくりと頷いた。そして、少し自信無さげに、思い出すように言葉を続けた。

「『やっと見つけた。』インデックス『禁書目録』の後継者……』」

ガタンッ！

突然、ユウトがテーブルを強く叩いた。そこにいる全員が、いつも冷静で物静かなユウトの行動に驚きを隠せないでいる。

しかし、ユウトはそんなことなどお構い無しに、ブツブツと独り言を始めた。

「禁書……能力……お……」

皆、ユウトが次の言葉を発するまで、静かに彼を待ち続けた。しばらくして、ユウトがキツカに話しかける。

「キツカ。明日は確か、定期検査の日だったよな？」

「え、そ、そうだけど………？」

「レンちゃん、君も一緒に来てくれ」

「え、は、はい………」

「ちょ、待てよ、ユウト。ちゃんと話してくれねえと、何がなんだかわけが分かんねえよ」

いきなり話を進めるユウトを、トウマが静止する。ユウトは、少し言葉を濁す。

「いや、その、あれだ。レンちゃんのことを支部長に言わないとあれだ。ここに置くことができないから………」

「それだけか？」

今度は、イツキがユウトに尋ねる。ユウトが言葉を詰まらせた。

嘘が下手なくせに、無理してついているのが見え見えだ。

そこへ、キツカが更に畳み掛けた。

「ユウトくん。私には絶対に嘘がつけないの、知ってるでしょう？」

キツカの手が、ユウトに迫る。心を読むサイコメーター精神感应能力者による、脅しという名の尋問に、ついにユウトは観念した。

「レンちゃんが本当に『禁書目録』の能力者か、確かめる必要があるんだ………」

「何なの、その『禁書目録』って」

ヒカルの問題に、ユウトはしばらく黙り、やがてゆっくりと絞り出すように答えた。

「『禁書目録』。すべての超能力を有する、超能力者の中の超能力者だ……」

1 - 5 H i k a r u 謎の能力(後書き)

次回から第二話です。

果たして、レンの能力とは？
そして、黒ずくめの正体は？
乞うご期待です(・o・)ノ

2 - 1 R e n 超能力者特別支援事務局（前書き）

第二話に突入します。この話から、皆の能力を事細かく説明していきます。

2 - 1 Ren 超能力者特別支援事務局

その部屋は、テレビ画面のようなモニターが壁一面に並んでいた。白衣を着た研究員らしき人々があちこちを歩き回り、計器を操作したり、パソコンと睨み合ったりしている。

「うわぁ……」

レンは、『それ』を見た瞬間、思わず声を上げてしまった。すぐにハツとなって口を塞ぐ。

横で小さく笑う声があった。恥ずかしくて、顔が真っ赤になった。

「あ、ごめん。でも、びっくりするのは無理ないって」

そう言っただけで弁解するのは、イツキと同じシェアハウスに住む本条トウマさんだ。男の人にはちょっと珍しく、セミショートの金髪を後ろで一つに束ねている。イツキに聞いたのだが、金髪は染めているのではなく、地毛らしい。

レンは、ユウトに連れられて町の中心街にある建物に来ていた。

総務省特設機関超能力者特別支援事務局、南中央支部。

超能力者を管理し、彼らの生活などを支援する代わりに、彼らの能力を研究することで『超能力』とは何かを解明するために創られた国家機関。

イツキは、ここに所属しているユウトの世話になる代わりに、被験者として定期的にここに来ては研究の手伝いをしているのだそうだ。

「まあ、手伝いっつーか、どんな能力を保持していて、どのくらいの危険度なのかを調べるだけなんだけどな」

ユウトがレンに説明をしているときに、横からイツキがそう言っていた。

レンは知らなかったのだが、超能力にはきちんとレベル分けがさ

れているのだ。

まず、能力の種類によつて物理的干渉系の『PK』と精神干渉系の『ESP』に分けられる。それを更に、危険度の高い順に第一級から第九級、そして無指定まで区分けされる。初めての人は、無指定から始まつて様々な検査を受けることでレベルを決めるらしい。

そして、これからイツキの定期検査が行われるということ、レオンはトウマと一緒にモニター室にやっけてきた。キツカとヒカルは別の部屋で検査を受けており、ユウトは建物に入つてすぐに、別行動となっている。

一番大きなモニターにイツキが映し出された。イツキは身体中に吸盤のようなものを貼り付けている。それぞれの吸盤からはコードが伸びていて、後ろにある大きな機械に繋がっていた。

『これより、被験者ナンバー〇七五、五十嵐イツキの能力検査を開始します』

電話の番号案内のような、無機質な声が部屋に響く。

声と同時に、イツキの前に大きな運搬用のトラックが床から出てきた。それを見て、モニターの向こうで、イツキが笑う。

「うはっ。今回はまたでかいなあ」

『五トントラックですので』

「へえ。やっちゃっていいの？」

『問題ありません』

「あ、そ」

無機質なアナウンスに適当に相槌を打つと、イツキは右手を前に出した。

『検査、開始……』

グシャッ。

アナウンスの開始の合図が終わる前に、トラックはぺったんこになつていた。イツキは右手を元に戻すと、体中に張りついている吸

盤を剥がし始める。

『……まだ、開始してません』

「データは取れただろ？」

アナウンスに対し、イツキは面倒くさそうに答える。声はしばらく黙っていたが、イツキがすべての吸盤を剥がし終わるころに『……検査を終了します』とアナウンスした。

「凄い……」

レンは息を呑んだ。自分も念動力は持っているが、あれほど強い力が出したことがない。

「ああして、上から物理的エネルギーの塊を落下させるつてのが、イツキの十八番技なんだと。アイツは『不可視の隕石』インビシブル・メテオって呼んでる」

横からトウマが説明を加える。だが、レンの耳にはその言葉はあまり入ってはいなかった。

レンの脳内で、何かがグルグルと巡っていた。頭が熱い。思考が一気に深いところまで沈んでいき、つい先程の映像を認識、さらに分析していく。知りえるはずの無い情報が自分の中を走り回り、イツキの能力に関する知識がどんどんと埋まっていく。

「……『空間』を操ることが、イツキの念動力？」

「お、レンちゃん、鋭いじゃん」

「え、あ、うん……」

トウマの褒め言葉に、レンはあいまいに頷く。既に思考は元通りになっていた。

（なんだったんだろう、今の……）

あれも超能力の一つなのだろうか。まだ、レンは自分の『能力』をすべて把握できていないのかもしれない。

しばらくして、イツキが仏頂面でモニター室に入ってきた。しかし、レンが駆け寄ると、それまで無表情だった顔に、小さな笑みがこぼれた。

「お、レン。見てたか？」

「うん。凄かった」

「そっか。……あ、トウマ、次お前だと」

「おう、了解」

イツキに言われて、今度はトウマがモニター室を出る。すると、入れ違いにヒカルがモニター室に入ってきた。

「ヒカル、もう終わったのか？」

「うん。結果は上々。『瞬間移動』も『座標移動』も前より精度が上がってるって。……いつちゃんは？」

「こっちは五トントラックを潰してきたとこだ」

「さすが、相変わらず桁違いの威力ね……」

結果を聞いたヒカルの顔が、軽く引きつっていた。それに対し、イツキは軽い表情で楽勝だったと付け足した。ヒカルは小さく肩を竦める。

「今更ながら、いつちゃんがテロ組織に入らなくて良かったと思えるわ……」

それには、レンも頷けた。イツキほどの能力者がレンを追っていた黒づくめのような輩に肩入れすれば、日本の治安などあつという間に均衡を崩すに違いなかった。

すると、イツキは面白そうに笑った。

「お前にもそれは言えるだろ、第二級瞬間移動能力者さん」

「え、ヒカルさん、そんなにすごいのか？」

イツキの言葉に、レンは驚いた。すると、ヒカルは少し照れて顔を赤くしていた。

「ま、まあね。ってか、いつちゃんの念動力は第一級なのよ」

「そうなの？」

レンがイツキに尋ねると、イツキはうーん。と小さく唸った。
「念動力だけならな」

「え？」

「いつちゃん、遠隔念動力は違うの？」

「スケボーにしか使えないから、そっちは四級なんだ。だから、総

合評価は第三級なんだよ」

その言葉を聞いて、レンは昨日のことを思い出す。そういえば、遠隔念動力はスケボーにしか適用できない。とイツキ自身が言っていた。

ヒカルはそのことは知らなかったようだ。気まずそうにイツキを見ている。

「……ごめん。知らなかった……」

「いや、俺も言っただけだったし。……それより、始まりそうだけ」
イツキは頬を掻きながら、モニターに視線を移した。レンとヒカルもそれに続く。

モニターに、新しい画像が映し出された。

「……なに、あれ……?」

レンは、自分の目を疑った。

モニターに映し出されたのは、トウマだった。ただし、トウマの置かれている状況が、異常だった。

トウマは、金属製の分厚い板に全身を拘束されていた。かろうじて目の部分だけが見える程度の空間しか空いておらず、他は何重にも強固に板に留められている。拘束具も金属製だった。

「これが、検査なの……?」

レンには、目の前の光景が、『検査』には到底見えなかった。これでは、『拷問』といった方が近い気がしてならない。確か、トウマは発火能力者^{パイロキ}だったはずだ。しかし、その能力検査にこれほどのことをする必要があるので、疑問が残る。

先ほどまで優しく接してくれたトウマの余りの代わり様に、レンはいつの間にか拳を強く握っていた。

「それだけ、トウマの『力』は危険なんだよ」

レンの隣で、イツキは苦虫を噛み潰すような表情をしていた。

「アイツは、ここが抱えている能力者の中で、一番強い能力者なんだ」

「発火能力って、そんなに怖い能力なの？」

「違うの、レンちゃん」

「違う？」

ヒカルがレンたちの会話に割り込んだ。レンは一度は落ち着いた声のヒカルに冷たい視線を投げるが、ヒカルが爪が食い込むほどに腕を握っていたのを見て、直ぐに考えを改めた。トウマとヒカルは従兄弟だと聞いている。この中で一番辛いのは、ヒカルなのだ。

「違うって、どういうこと？」

「トウマくんは確か発火能力者でも、あるけど、そっちはサブ能力に過ぎないの。彼の本当の能力。それが危険なのよ」

「……その能力って、何？」

レンの問にヒカルが答える前に、あの無機質なアナウンスがモニター室に響き渡った。

『これより、被験者ナンバー〇六八、特級能力者、本条トウマの能力検査を行います』

2 - 1 R e n 超能力者特別支援事務局（後書き）

最も危険とされるトウマの『真の能力』とは一体！？
次回はヒカル視点を予定してます。

2 - 2 H i k a r u 『強固なる神』(前書き)

タイトルはヒカルサイドですが若干、ユウト視点も入っています。
ついに支援局南中央支部支部長一行と、敵サイドが登場です。

2 - 2 Hikaru 『強固なる神』

ユウトは、厳格な雰囲気のある部屋で一人待機していた。

(相変わらず、ギャップのある部屋だなあ……)

部屋の主の性格と部屋の雰囲気を比べて、ユウトは小さく肩をすくめる。

しばらくすると、部屋のドアがゆっくりと開いた。

「アズリ。今度の被験者のデータは集め終わったか？」

『バッチシなのですよ、お姉さま。ちよっと通ってる高校で停学を何度か喰らってるくらいで他は犯罪歴とかはないみたいですの!』

「ほう。ならば大歓迎であるな。……おい渡瀬、次の定期検査に来るように被験者に伝えておくんだ」

「了解しました」

部屋に入ってきたのは、何故かチアリーダーینگに使うバトンを持った妙齢の美女と、首に黒いチョーカーを巻いた少女、そして体格の良い中年の男性という、何ともアンバランスな組み合わせの三人組だった。

ユウトは三人組が入るとほぼ同時に立ち上がり、中央の女性に敬礼をする。

「古賀埜局長。お待ちしております」

「おう。私もお前と会つのが楽しみにしていたぞ。篠山管理官」

妙齢の美女 南中央支部長、古賀埜（この）が楽しそうに笑う。ローズピンクのルーージュがよく似合っている。

すると、黒いチョーカーの少女がぴよんぴよんと跳ねながら、ユウトに敬礼を返してきた。

『ユウトさん、お久しぶりですよ！ キツカちゃんたちは元気ですの？』

「元気ですよ、アズリさん」

『敬語はやめてくださいですよ。ワタクシはキツカちゃんたちだけじゃなく、ユウトさんともお友達になりたいだけですの！』

明るくユウトに話しかける少女は、ユウトと話しているにもかかわらず、声を一度も発していない。しかし、彼女の『声』は、しっかりとユウトに届いている。

南中央支部所属、第三級『遠隔知覚能力者及び過去視能力者』、
古賀埜アズリ。

古賀埜の実の妹である彼女は、三年ほど前に事故によって声帯を潰しまい、それと同時に現在の能力を手に入れたのだという。

彼女は自分の意思を他者に伝えることで、意思疎通を可能としているのだ。その力は、人のみならず電子機器などにも応用が可能らしい。

二人が話していると、古賀埜は椅子に座らずにデスクに直接腰掛け、仲間はずれになっているのが面白くなさそうにバトンをくると回しながら足を組んだ。

「おい。私も仲間に入れろ」

「支部長、椅子にお座りください」

「黙れ渡瀬。私のモットーは『天上天下唯我独尊』だ」

「意味履き違えてませんか？」

「私に口答えするとは、随分と生意気になったものだな、篠山」

古賀埜がバトンをユウトに向けた。中年の男性　渡瀬支部長補佐が、肩をすくめる。

それで観念したと認識したらしい。古賀埜は楽しそうににんまりと笑った。美人なのに、何故かその笑い方はとても不気味である。いや、美人だからこそ。だろうか。

「では、話題を変えよう。『禁書目録』が見つかったというのは本当なのか？」

「……あの、いきなり大きく変えすぎてませんか？」

「質問に質問で返すな、馬鹿者」

古賀埜がバトンで机を叩いた。使い方を大いに間違えているのだが、あえてそこには誰も触れない。

「篠山君、報告を頼む」

渡瀬がため息をつきながら、ユウトに説明を求める。ユウトもやれやれ。とでもいう風に小さく肩をすくめた。

「……分かりました。『禁書目録』について、報告します」

「おう。頼むぞ」

一向に椅子に座る気配を見せない古賀埜を目で見やりつつ、ユウトは報告を始めようとした。

そのとき、

『支部長！　緊急事態です！』

職員からの放送が、局長室に響き渡った。

ユウトが古賀桝局長と会話をしていた数分前……。

「トウマくん……」

ヒカルはモニター越しに、何重にも拘束されたトウマを見ていた。何度見ても、あの光景は決して見慣れない。ヒカルは思わず目を逸らしそうになる。

(……駄目……！)

でも、ヒカルはモニターから目を逸らさなかった。あそこにいるトウマが、きちんと向き合っているのなら、ヒカルが目を逸らしていいはずがない。と心に語りかける。

隣を見ると、レンがイツキの横でモニターを怒っているよう目で見つめていた。当たり前だ。普通、あれは『拷問』にしか見えない。

『検査を開始します』

聞き慣れた無機質な声。それと同時に、トウマの両腕に当たる部分に変化が現れた。

金属製の拘束具が少しずつ盛り上がっていく。それに合わせて、板との接合部がメリメリと浮き上がる。

「え……？」

イツキの横でそれまで怒りに満ちた目をしていたレンが、驚愕の表情を浮かべている。無理はない。ヒカル自身、『アレ』をはじめて見たときは、驚きと恐怖感で何も言えなくなってしまうた。

『ヒュベリオン
強固なる神』

それが、トウマの『真の能力』だ。ヒカルも詳しくは知らないが、脳から興奮物質を異常分泌することで、尋常ならぬ力を行使用することが出来る能力だと聞いている。トウマは、この力を使っている間、身体中が沸騰したように熱くなるんだ。と言っていた。

「ああああああっ！」

両腕の拘束がいとも簡単に外れた。続けて、トウマは胸の部分の拘束具に手をかけた。指が拘束具に食い込む。まるで布を引きちぎるようにトウマは拘束具を剥がしていく。

助けて……。

ヒカルの脳裏に、八年前の記憶が蘇る。

助けて、トウマくん……。

「……っ！」

何度、過去をやり直したいと思ったか、数えきれない。あのとき、ヒカルがトウマに助けを求めなければ、彼はこんな場所にいなかったのかもしれないに……。

「うああああああっ！」

突然響いたトウマの咆哮で、ヒカルは我に返った。モニター室がざわついている。モニターに目を移すと、そこには信じられない光景が映っていた。

「……なに、コレ……」

拘束具に、電気が流れていた。それが直接トウマの体に流れ込んでいく。残す拘束具は下半身のみとなっていて、電流が流れるたびにトウマの上半身が跳ねるように金属の板に打ち付けられている。ヒカルは思わずモニターに駆け寄った。

「トウマくん！」

モニターの向こうで、研究員の人たちがトウマの拘束具を外そうと計器を操作している。でも、拘束具が外れる気配は無かった。

後ろで何かがぶつかる音がした。振り向くと、イツキが局員の人に掴みかかっている。

「おい、あんなのいつもの検査じゃないだろうが！ どうなっている！」

「わ、分からない！ 私たちだって想定外の出来事なんだ！」

イツキに掴みかかれた局員の人が一瞬、戸惑いの声を上げている。周りで他の局員の人はどこかに連絡を取っている。

トウマを襲った電流は、すぐに収まった。しかし、トウマはぐったりとして、ピクリとも動かない。周りの局員が急いでトウマの拘束具を外しにかかる。

「ちょっと、いったい何が起こってるの！」

そこへ、キツカがモニター室に入ってきた。最初はただ慌てているだけだったが、モニターを見て一瞬で青ざめた表情に変わる。

「……トウマ！」

「ダメです！ すべての機器が使えなくなっています！」

局員の一人が、パソコンのような機器をいじっているけれど、うんともすんとも言わない。すぐさま、キツカが機器に触れる。

「……ハッキングされてる。敵は、こちらの第六十五プロテクトを突破。このままじゃこのプログラムをすべて支配されるわよ！」

キツカは『精神感応』で得た情報をすぐさま局員たちに伝える。

「で、でも、どうすればいいんだ……？」

「アズリをここに連れてきて！ 局長室に連絡は？」

「既にしてあります！」

「なら、それまでに使える機器を探して。今すぐよ！」

キツカは冷静に局員たちに行動を指示していく。ある程度の説明を終えると、キツカは部屋の隅にある金庫のロックを外し、中から拳銃を一丁取り出して腰に装着した。そして、ヒカルたちの方を振り向く。

「ヒカルとイツキは私と一緒にトウマのところへ！」

「う、うん！」

「わかった。……行くぞ、レン！」

ヒカルは頷き、イツキも隣にいるレンに呼びかける。ところが、レンは突然その場にうずくまり、動かなくなってしまった。

「……………」

「レン？ おい、どうした、レン！」

イツキがうずくまったレンに必死に呼びかける。レンは、何かをブツブツと呟いていた。

イツキがレンの肩を揺さぶる。

「レン、レン！」

「……来る……」

「……え？」

レンの呟きに、イツキが動きを止めた。ヒカルとキツカもレンを見やる。

次の瞬間、レンが目を思いっきり見開いて上を見上げる。

「来る！ ここに！ 今！」

レンがそう叫ぶと同時に、突然、すべてのモニターが別の画面に切り替わった。蝙蝠の羽根に交差した二本の三叉槍トライデントの意匠、その下には『M・CORPORATION』と書かれている。

「何だ、コレ……」

誰かがそう呟くと、モニターから笑い声が響いてきた。

『超能力者特別支援事務局の皆様。はじめまして。我々は国際テロ組織、『メフィスト・コーポレーション』です。ただいまより、この南中央支部は我々が占拠いたしました』

すると今度は、銃器を持った黒ずくめの人間たちがモニター室に入ってきた。「動くな！ 手を上げて後ろで組め！」と局員たちに指示をする。

ヒカルたちも大人しく手をあげてその手を後ろで組む。今はあまり派手な行動は取れなかった。

黒ずくめの一人がキツカに近づいて、腰の拳銃を外しにかかる。

「変なところ触ったら蹴るわよ」

キツカが悪態をつくくと、男はフンと鼻を鳴らした。

「相手の心情を読み取ることしかできない木偶の坊が何言ってるんだ」

「なんですって……！」

拳銃をホルスターごと外して床に放り投げると、男はキツカちゃん
の頬を殴った。

「あぐっ」

「キツカちゃん！」

「所詮、銃がなけりや俺たちに対抗できないくせに、生意気言ってる
んじゃないよ」

ヒカルがキツカに駆け寄ると、男は二人に銃を向けた。

「動くなつつつただろうが、この小娘！」

男が持っていた銃の引き金を引こうとする。すると、モニター室
に再びあの声が響いた。

『待ちなさい。まだ殺してはならない』

その声を聞いて、男はチツと舌打ちを打った。引き金から指を外
して「立て」とだけヒカルたちに言った。

それを確認したのか、声が話を続ける。

『さて、私たちは決して貴方たちを殺しに来たわけではありません。
ただ、交渉しに来ただけです』

「交渉……だと？」

声に対し、イツキが不審そうな視線を投げる。その後ろで、レン
が震えていた。

そして次の瞬間、声の主はとんでもないことを口にした。

『『禁書目録』を渡しなさい。でなければ、本条トウマを殺させて
いただきます』

2 - 2 H i k a r u 『強固なる神』（後書き）

はい。支部長が登場しました。かなり変なキャラクターです（笑）。こんなこと言ったら後ろからあのバトンで殴られそうですね。

元々は渡瀬副支部長が古賀埜支部長の名前で支部長の立ち位置で登場の予定だったのですが、何となく思いつきで変えてしまいました（何

書けば書くほどにアクの強いキャラクターになっていきそうな匂いがプンプンする古賀埜支部長。イツキたちよりも目立たれても若干困るなー。と思いつつ、目立たせちゃって良いんじゃない？とも思えてしまう人です。

支部長トークが続きましたが、敵サイドも微妙に登場してきました。つてか、いきなりサイバーテロですよ。しかもトウマを人質にとってるし。

次回。レンとイツキたちはどうやってこの危機を切り抜けるのでしょうか？

頑張って執筆しますので、しばしお待ちを>><

2 - 3 K i k k a 襲撃（前書き）

遅ればせながらの投稿です。かなり間が空いたなあ（汗）
今回のお話は、これまで少し影の薄かったキツカ視点です。

2 - 3 K i k k a 襲撃

『『禁書目録』を渡さなければ、本条トウマを殺します』

あまりにも理不尽な要望が、モニター室に響き渡った。

「ふざけんじゃないわよ……！」

キツカは、突如現れてきたテロ組織の要望に、拳を握りしめた。横目でレンを見ると、レンはイツキにしがみついて小さく震えている。イツキは、そんなレンを黒ずくめたちから遠ざけようと、自分の背中側にレンを押し、黒ずくめたちと対峙する。

黒ずくめの一人が、二人に近寄った。ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

「昨日はよくもやってくれたな、小僧」

「……………」

しかし、イツキは答えずに、黒ずくめを睨み付けた。それが面白くなかったようだ。黒ずくめはもっていた拳銃でイツキの頬を殴る。

「……………」

「いっちゃん！」

「イツキ！」

ヒカルとキツカはイツキに駆け寄ろうとした。

しかし、

「動いちや駄目だよ」

まだ年端も行かないような少年の声が、後ろから二人を“引き止めた”。

「え……………」

「うご、かない？」

キツカとヒカルは、指一本すら動かすことができなかった。何かに縛られているわけではない。まるで、金縛りにあっているように、

二人の動きは封じられていた。

「大人しくしてくださいよ。ボクは戦うのつてキライなんです」
二人の動きを封じたのは、黒づくめのなかでも一際小柄な少年だった。レンと同じ年くらいに見えるが、今のキツカたちに彼の姿は見えなかった。

「申し遅れました。ボクはメフィスト・コーポレーション所属の超能力者です。一応、遠隔念動力を持っています」

少年は淡々とした口調で話しながら、左右の指を鍵盤を弾くように動かした。

「ちゃんと手を後ろに回して大人しく座ってくださいな」

少年がそう言うと、キツカとヒカルは両手を後ろに回し、その場にゆっくりと腰を下ろした。少年が楽しそうに笑う。

「面白いでしょう？ ボクはこの力を『人形劇』マリオネットって呼んでます」

少年はそう言いながら、後ろからヒカルに近寄った。その手にはスタンガンが握られている。

「では、瞬間移動能力者のお姉さんには、ちょっと失礼しますね」

次の瞬間、キツカの隣でバチンという音が鳴り、紫電が散った。

「うあつ！」

「ヒカル！」

隣でヒカルがその場に崩れる。意識はあるようだが、身体中をガクガクと痺れさせていた。

「『強固なる神』レギュリオンのところへ行かれては困りますからね。しばらく大人しくしてください」

少年は微笑みながらさういうと、次はキツカの両手に手錠を掛けた。いつの間にか、局員たちも部屋の角に集められ、反抗できないように拘束され、頭に銃を向けられていた。

「おら！ 反撃してみろよ」

部屋のほぼ中央で、イツキが男に腹を蹴られ、咳き込んだ。男は更に後頭部を撲る。イツキはついに、床に倒れ伏した。

「イツキ、イツキ！」

イツキの後ろにいたレンが、しゃがみこんで倒れたイツキを揺さぶる。イツキは起き上がるうと体を浮かせたが、男に背中を踏まれ、また地面に伏した。

「……変だなあ。どうしてあのお兄さんは反撃しないんです？ お兄さんの能力なら楽勝じゃないんですか？」

キツカの隣で、黒ずくめの少年が首を傾げた。キツカはそれに対し、だんまりを決め込む。

イツキは反撃を“しない”のではない。反撃が“できない”のだ。イツキの念動力は、空間を固定化したり、エネルギーの流れる方向を変えたりすることで、標的を押し潰したり、凄まじい勢いで風を起こしたりすることができる。

しかし、イツキは自分にはまだ強力すぎる能力を完全にコントロールする術を持っていない。全方位殲滅型の能力しか出せないイツキは、黒ずくめを倒すと同時にモニター室にいるキツカたちまで巻き込む危険性があったのだ。

『そのくらいにしときなさい。我々は殺しにきたのではないのですよ』

そこへ、それまで何も言わなかったモニターのコウモリが、イツキを踏みつける男を止めた。男はモニターを見上げて小さく肩を竦める。

「一人くらいいいではないですか、ファウスト様。こいつらが如何に無力かを見せつけるくらいはさあ」

『……まったく』
ファウストと呼ばれたコウモリは、小さくため息をついた。イツキを踏みつける男は、更に言葉を続ける。

「第一級の念動力能力者とか言いながら、まったく反撃しないガキとか、銃を奪われた程度で使い物にならない精神感應能力者なんか、無力と呼ばず、なんと呼ぶんです？」

「なんですって……！」

男の言葉を聞いて、キツカは男をキツと睨む。しかし、男は全く動じずにさらにキツカに追い打ちをかけるように笑った。

「ああ、聞こえちまったか？ でも本当のことだろう、木偶の坊さんよお」

「……………っ！」

言い返せなかった。

いや、もしかしたら何か言い返せたのかもしれない。けれども、キツカにはその言葉が見つからなかったし、声の言うことはあながち間違っではないなかった。

サイコメトリー
精神感応

テレパシー

遠隔知覚

クレヤボヤンス

透視

プレコグニション

予知

ダウンング

探知

五種類の能力を保持しながら、そのすべてが精神干渉系のESPに属するキツカの能力は、戦闘では無力に等しい。何とか精神感応や探知などを応用して、銃を難なく扱えるようにはなっているが、それだっって今のように銃を奪われてしまえば、結局無力と化してしまう。

これまで自分でも抑えていた、能力への劣等感が、男の言葉によって再び自身の心を脅かし始めていた。

「……………私は、無力……………」

（違う。違う違う違う違う違う違う違う！）

必死になって頭からその考えを消そうとしたが、一度甦ったことは、簡単には消えてくれなかった。

菊花^{きくか}、君は無力だな。

脳裏に“あの男”の言葉が過る。

お母さんに言うんじゃないよ。君だって、知られたくないだ
ろ？

「……やめて……」

「……キツカ、さん……？」

向こうの方で、それまでイツキを揺さぶっていたレンが、心配そ
うにこちらを見てくる。イツキも、首だけを動かしてキツカを心配
そうな眼差しで見る。

しかし、キツカの視界に二人は映らなかった。

特に、あのユウトとかいう男には……。

「……いやあ……」

記憶の中で、“あの男”が呪いの言葉を放つ。

君が××××××なんてね……。

「いやあああああああつ！」

耐えきれず、その場に崩れた。思い出したくないものを思い出し
てしまった。

自分が“こうなった”きっかけ。

自分の大切なものが、どんどん崩れていった瞬間。

その全てが、まるで鉄砲水のようにキツカに襲いかかった。

「……ん、“壊れ”ちまったか？　がはははは！」

崩れるキツカを見て、男はまるでそれが愉快で堪らないかのように大声で笑った。キツカの隣で、少年がやれやれ。とでも言うように、小さく両手を上げている。

「この、外道が……！」

イツキが悪態をつくくと、男は笑うのを止めて、イツキを見下ろした。

「ああ？　てめえも壊してやろうか！」

男はそう言つと、レンの長い髪の毛を引っ張って自分の方へ寄せた。

「やあつ、痛い！　離して！」

「レン！」

男はレンの胴体に腕を回すと、その体を易々と持ち上げた。

「触らないで。えっち！」

「けっ、未発達のガキが何ほざいてやがる」

男はレンに銃を突きつけながら、イツキを蹴って仰向けにした。

「う……」

「哀れだなあ。第一級念動力能力者さんよお。能力が強すぎる故に、俺たちだけを倒せないなんてな」

「……………」

「昨日の礼、たっぷりしてやるぜ！」

男の足が、イツキの左腕に降り落とされた。ゴキ、と、骨が折れた音がモニター室に響き渡る。

「うああああつ！」

成す術もなく、イツキが叫び声をあげる。レンはイツキのそばへ行こうと、必死になって男の腕の中で暴れた。

「イツキ、イツキ！」

「さて、次はドコにしようか？」

男はイツキの折れた左腕を爪先で突つつきながら、品定めをする

かのようにイツキの体を見る。

「よし……頭だ！」

「やめてえええっ！」

男の楽しそうな声と、レンの絶叫が響き渡り、男の足がイツキの顔面に向けて降り落とされようとしたそのとき、

「そこまです」

突如、モニター室の壁に扉が現れた。

2 - 3 K i k k a 襲撃（後書き）

視点をこころ帰るお話は難しいです。なかなか『ムシウタ』の岩井恭平先生のようにはいきません。

日々精進あるのみですね。頑張ります！（笑）

2 - 4 It s u k i 暴走(前書き)

今回はグロテスクな描写があります。

苦手な方はその部分だけを飛ばして読んでください。

「そこまでです」

突然、つい今さつきまで何もなかったはずの壁に、両開きの扉が出現した。黒づくめたちが一斉に扉に銃を向ける。

(あれは……)

イツキは、突然現れた扉の正体をすぐに察知した。記憶に間違いが無ければ、“アイツ”の能力のはずだ。

扉がゆっくりと開き始めた。男たちは微動だにせず、じっと銃を構えている。

扉の向こうから現れたのは、跳ねた青い髪が印象的な少年と、マントを羽織って白馬に乗っていそうなくらいに端正な顔立ちの青年だった。陶磁のような白い肌と透き通っているような碧眼が、見る者を魅了する。

「誰……？」

レンが、二人の男性を見て、首を傾げる。

「貴様、何者だ！」

扉の近くにいた黒づくめが、突然現れた二人の少年に拳銃を向けた。王子様の外見の青年はそれを横目でちらっとだけ見て、再び視線を前に戻した。

「超能力者特別支援事務局、南中央支部所属、ロレンス・高瀬・ア
ンダーソンです」

青年はそう名乗ると、パンツ。と両手を合わせ、黒づくめの拳銃に触れた。たちまち、拳銃が鉄屑に変化する。黒づくめは、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして自分の拳銃だった鉄屑を見つめるが、鉄屑が拳銃に戻ることは無い。

それが、ラリーの愛称で呼ばれる、イツキよりも三つほど歳上の青年の能力だ。

彼は、質量保存の法則や物質保存の法則に従う範囲内で、自身の触れたものの分子構造を変化させて、別の物質を作り上げることができる。

すると、青髪少年がモニター室をキョロキョロと見回し始めた。まるで、何かを探しているようだ。

「まずっ……」

イツキはそれを見て、冷や汗をかいた。折れた左腕を庇いながら身体を反転させ、うつ伏せになる。

「……イツキ？」

そんなイツキに、レンが首を傾げた。イツキは慌てて口元に人差し指を当てるが、時既に遅し。青髪の少年がこちらを向いた。

そして、

「やつほー、いつきー！ 今日も俺っちのこと愛してるー？」

次の瞬間、青髪の少年が、とんでもないことを口に出した。その場にいた意識のある者ほぼ全員が、少年の言葉にひきつった表情を浮かべる。レンは寒気を催したのが、一瞬大きく身震いした。

「愛してねえよ。バカヤロー……!!」

もちろん、そんなことに真面目に返す気など毛頭ないイツキは、青髪少年に対する怒りを覚えながら、プルプルと身体を震わせた。

「貴方の同性愛宣言に付き合っていたら、日が暮れてしまいそうです。さっさと事を済ませましょう」

イツキの返答に青髪少年が答えようとするのを遮るように、再び両手を合わせる音がモニター室に響いた。

ラリーの言葉に、蒼髪少年はラリーに敬礼のポーズをした。だが、そこに軍隊で見られるような厳格さは一切存在しない。

「へいへーい。じゃあ、さっさとこいつらをやつつけて、いつきーで遊ばせてもらうかにゃー」

既に、青髪少年の言葉に突っ込みを入れる気になれないイツキは、小さくため息をついた。

「ごちゃごちゃうるせえ！ 殺されてえのか！」

いい加減付き合いきれなくなったのか、黒ずくめの一人が青髪少年に銃を向けた。青髪少年は、それを面白いと言わんばかりの笑顔で見る。

「んんー？ それってアレ？ 『宣戦布告』ってヤツう？」

「だ、だったら何だよ！」

余裕綽々の青髪少年に対して、黒ずくめはかなりテンパっていた。虚勢を張りながら銃の狙いを定めようとする。

すると、青髪は少年はニカッ。と歯を見せて楽しそうに笑った。

イツキはあの笑い方を知っている。確実に、アイツなりの“楽しみ”を得たときの笑い方だ。

青髪少年は、右手を肩の位置まで上げた。

「じゃあさ、今から俺っちがするのって、『正当防衛』ってヤツだよねん？」

ピキンッ

「……………あ？」

黒ずくめは、何かにヒビが入るような音とほぼ同時に、自分の両手に視線を落とした。

黒ずくめの両手が、凍っていた。

「う、うわああああっ！」

黒ずくめの男が悲鳴を上げる。見ると、他の黒ずくめにも同じ現象が起こっていた。キツカの隣にいる『人形劇』マリオネットの少年も、両手を氷で封じられ、重そうに両手をだらんと下げている。

『人形劇』が、青髪少年を睨み付けた。

『念動力』アファ・マスター『水使い』ですか……！」

『人形劇』がそう言っていると、青髪少年は両手で大きく丸を作った。

「ピンポン！ 名乗り遅れちゃったけど、俺っちの名前は兼村^{かねむら}ヒロだよん。よろしくにゃーん」

青髪少年 ヒロは満面の笑顔で、『人形劇』にブイサインをする。『人形劇』は、フン。とそっぽを向いた。

「驚きましたね」

そう言ったのは、ラリーだった。

「兼村さん、と言いましたか？ さっきの検査では、『水を主に扱う念動力能力者』サイコキとしか聞いていなかったんですけど、こんな水のない場所ですらやって能力を発動したんです？」

ラリーの言う通りだった。モニター室には水道はない。火災時用のスプリングラーや、局員が持ち込んだペットボトルはあるが、スプリングラーは作動していないし、ペットボトルの水にも変化は全く無かった。

すると、ヒロは小さくため息をつきながら肩を竦めた。

「ロレンスさん。俺っち嘘はついてないよん。どっかのRPGじゃあるまいし、氷と水を区別するなんて愚の骨頂つてやつだにゃー」。

氷なんて、単に水が固体になったときの名称でしかないし、水なんて大気中にうようよいるにゃー」

ヒロはそう言いながら、手のひらにネコの形をした氷の彫刻を出現させた。

ヒロの能力は、指定した空間の圧力を調整して、大気中の水分子を液体や固体に変化させるものだ。また、水がある場所では、その水を自由自在に操ることもできる。

「なるほど。それはなかなか……面白いですね」

ヒロの説明に納得したのか、ラリーはそう言って両手をパッと合わせると、黒ずくめたちの銃器に触れる。銃器は目映い光を発すると、鉄屑に変わった。驚く黒ずくめを他所に、ラリーはどんどん銃器を鉄屑に変えていく。

「計算外だな……」

イツキの横で、レンを捕らえている黒ずくめが小さく舌打ちをした。だが、声には何故か余裕が見える。

すると、黒ずくめは銃を持ったまま、“凍っている”手をヒロに向けた。周囲の空間が、瞬時に熱くなる。

「ヒロ、避けるおっ！」

イツキがそう叫んだのと、

ゴオッ！

「がはっ」

突然吹いた熱風で、ヒロが壁に叩きつけられたのは、ほぼ同時だった。

ラリーが、黒ずくめを睨む。黒ずくめの手には、既に氷は無かった。
「発火能力者ですか……」

「ご明察だ。あのガキの能力は、俺とは相性が悪いぜ」

黒ずくめは得意気に笑うと、レンのこめかみに銃を向け直した。

「手を上げな。じゃなきゃ、このガキの頭が無くなるぜ？」

「な……！」

イツキは絶句した。モニターのコウモリは、既に何も言う気が無いらしく、さつきから一言も口をはさんでいない。

レンはガタガタと震えていた。まだ能力を開花して間もないレンは、能力の使い方をほとんど知らない。昨日の霧も、イツキたちの能力までキャンセルしてしまうから、使い所が難しい。

（畜生……！）

イツキは怒りを覚えていた。それは、他の誰でもない、自分自身に対する怒り。

（何が第一級念動力だ。ここで使えないで、何が能力なんだ……！）

全方位殲滅型の能力であるイツキの能力では、この状況を打破することはできない。確実にレンやラーイーを巻き込んでしまう。

（チカラが、欲しい……！）

レンたちを救うチカラが、

黒ずくめだけを滅するチカラが、

何者にも屈せず、大切なものを護りきるチカラが……！

ドクン

イツキの中で、何かが胎動した。目の前が一瞬だけ闇に包まれる。闇の真ん中に大きな白い扉が見え、その扉が、ほんの少しだけ開いたように見えた。

「うあああああっ！」

イツキは吠えた。“何か”が自分の中で暴れ回っているのを感じる。イツキはレンを抱えている黒ずくめを睨んだ。

(あの腕が憎い……)

イツキがそう念じた瞬間、

ポトツ。

「……………え？」

黒ずくめが、すっとんきょうな声を上げた。何かが落ちたような音を聞いて、黒ずくめは何故か、銃を持っている自分の右腕に視線を移した。

黒ずくめの右腕の、二の腕から先が失われていた。

「ぎゃあああああ！」

「きゃあっ！」

遅れてやってきた痛みに、黒ずくめは悶えた。左腕で抱えていたレンを床に投げつけ、右腕の切り口を必死に押さえる。

「……………ちいっ！」

『人形劇』が両手の氷を近くの机で叩き割り、血塗れの両手をイツキに向けた。

「ここで暴走されても困るんですよ……！」

『人形劇』はイツキに能力を発動しようとした。だが、それよりも一瞬速く、イツキの方から強風が吹き荒れる。

ポトポトツ

「ぐあああああっ！」

『人形劇』の両腕が、鋭いナイフで斬られたかのように、切り落とされた。

「イツキ！」

レンが叫ぶ。しかし、今のイツキにはレンの声は届かない。

(憎い……！)

イツキの中を、ただそれだけが支配していた。

「俺から……」

イツキの脳裏に、七年前の“あの事件”がよぎる。

「俺からこれ以上何も奪うなっ！」

イツキの咆哮に共鳴するように、更に強く風が吹き荒ぶ。

風は黒ずくめだけを切り裂いていき、レンたちの周りでは優しく頬を撫でるように吹く。

「イツキ……」

レンが、ゆっくりとイツキに歩み寄る。レンは血溜まりに思わず目を逸らすが、それでもイツキに触れようと前へ進む。

「あああああっ……」

イツキには、もう何も見えていなかった。黒ずくめは既に戦意を喪失しているが、イツキは風を止めようとしなかった。

「イツキ……」

レンが、イツキの頬に触れた。そのまま、ゆっくりとイツキの頭を抱きしめる。

「もう、大丈夫だよ」

レンがそう言ったのと同時に、レンの体から霧が吹き出した。イツキの風も、ピタリと止む。

(……レン……)

混濁した意識の中で、イツキはあの白い扉が再び閉まるのを感じた。

「うわあ。こりゃ酷い。作戦失敗だわ」

最後に惚けたような少女の声を聞きながら、イツキはゆっくりと眠りに落ちるように意識を失った。

2 - 4 Itsuki 暴走（後書き）

今回はかなり長々とした話になりました。

本当は支部長一行も出てくるはずなのですが、書いているうちに濃いはずの古賀埜支部長がどんどん薄くなってしまう……。支部長一行はもう少し先の再登場になります。

今回初登場のラリーとヒロ。ヒロのふざけた口調は実はかなりお気に入りなので、どんどん使っていきたいです（笑）

次回はトウマ視点で物語が展開します。

2・5 Toma 『炎纏いし蜥蜴』（前書き）

今回は今までの中で最も長いです。

初・5000文字突破！

……特にめでたくはないですが（笑）

2 - 5 Toma 『炎纏いし蜥蜴』

時間は少し遡り、トウマのいる検査室に舞台は移る。

(オレは……)

トウマの意識は、朦朧としていた。自分の身に起こったことを思い出すことができない。

(そうだ……検査は?)

トウマは能力を使おうと、意識を集中させる。しかし、いつも感じる、身体が煮えたぎるような感覚は、いつまで経ってもやっとなかった。

(なんだ、コレ……。力が、出ない……)

それだけではない。身体が言うことを聞かなかった。指一本動かすことすらままならない。身体の異変と、朦朧とした意識に戸惑いを抱くトウマの耳に、聞き慣れない声が入ってきた。

『繰り返します。』インデックス 『禁書目録』を渡さなければ、本条トウマを殺します』

(なん……だと……?)

次の瞬間、トウマは拘束具から解放された。重力に倣って、そのまま床にうつ伏せに倒れる。

「うつ……」

小さく呻くと、今度は誰かに腹部を蹴られた。

「がはっ！ げほっ、ごほっ」

蹴られた衝撃で、トウマはある程度の意識を取り戻した。

(そうだ。オレ、検査の途中で、いきなり電気を……)

ようやく、自分の身に起こった出来事を、トウマは思い出した。

検査の途中で、いつもは流れなかった電流が、トウマを襲ったのだ。

「一体、どうなってやがるんだ……？」

トウマは、まだ覚醒しきっていない体を無理矢理起き上がらせようと、床に手をついた。

しかし、

「起きちゃだめですう」

舌足らずな少女の声が聞こえた瞬間、まるで自分が磁石になってしまったように、トウマは床にべったりと貼りついた。

「っ！」

どんなに力を入れようと、体は床から離れなかった。

「ふふふう。『ヒュクリオン強固なる神』ならともかく、生身で立ち上がるうとしても、絶対に無理なんですからあ」

また、頭の上で少女の声が聞こえる。なんとか首を横に動かし、目を声のした方へ向ける。

そこにいたのは、二人の少女だった。二人とも、ヒカルやイツキと同じくらいに見えた。一人は黒いフリルだらけの洋服 所謂ゴスロリファッションに身を包み、もう一人は真っ黒いパーカーワンピースを着て、フードをすっぽりと被っていた。

(……女の子……？)

心の中でそう首を傾げると、パーカーワンピースの少女がトウマの頭を踏みつけた。

「うぐっ」

「これがこの支部で一番強い能力者？ とてもそうは見えないんだわ」

のんびりとした、それでいてどこか凄みのある声で、パーカー少女はトウマを見下ろした。

すると、ゴスロリ少女がしゃがんでトウマの頭を撫でる。

「そおらしいです。でも、このお兄さんカッコいいです。お持ち帰りしたいですねえ」

「アンタの好みって、こういう男？」

「筋肉が素敵ですう。あと、この金髪もなかなかですよ」

ゴスロリ少女はそう言いながら、トウマの髪を猫を撫でるように優しく梳く。

トウマは、自分の置かれている状況を改めて確認する。他の局員はどこにも見当たらない。追い出されたのだろうか。いや、それなら応援部隊がすぐに来るはずだ。

すると、トウマの考えていることを感じたのか、パーカー少女がニヤリと笑う。

「ああ。他の局員なら、アタシの力でみんな別の場所に飛ばしたんだわ」

「……飛ばした？」

「そ。アンタの従妹と同じ能力だわよ」

どうやら、パーカー少女は瞬間移動能力者のようだ。しかし、何故ヒカルテレポーターの能力まで知っているのだろうか。

「……そっちの子は？ この変な力は君なんだろ？」

「そおですよ。私は『電磁使い』^{フレミング}っていいます。電気と磁力を操る念動力ですねえ」

ゴスロリ少女がそう言うと、少女の右手で紫電が弾けた。なるほど、とトウマは思った。先ほど自分を襲った電流は、どうやらこの少女の仕業だったようだ。

「とりあえず、お兄さんは少しじっとしててくださいねえ。『禁書目録』が手に入ったら、すぐに私たちは退散しますからあ」
「狙いは、レンちゃんか……！」

トウマは少女たちを睨みつける。ゴスロリ少女はニッコリと笑ったままコクリと頷いた。

「そおですよ。今、お兄さんの命はあの子に握られているんですよ。あの子が刃向かったら、お兄さんに私の電気がビリビリなんです。私の最大電力だと、ゾウさんも一分は動けなくなるんですよ」
「お……そりゃ、死ぬわな」
トウマの体に冷や汗が伝う。さすがにそんな死に方はいやだ。だが、幼いレンをこの少女たちに渡すのも、トウマの信念が許さなかった。

トウマくん、助けて……。

すべてから見放され、孤独に打ちひしがれた従妹、

俺にかまうんじゃないねえ！

大事なものをすべて失い、一人孤独に逃げ続けた少年、

……私に、触らないで！

それまでの幸せを壊され、今でも孤独感に苛まれる少女、

その全てを護れる、強い人間になりたかった。

彼らの孤独をすべて理解している自分が、彼らとは違い、『孤独』を持ち得ることのなかった自分こそが、彼らを守る強き『剣』ツノになるのだと、そう決めていたのだ。

そして、昨日、トウマに護るべきものが増えた。

いつも学校をサボってばかりで、誰よりも優しいくせに、他人に深入りしすぎないようにしているあの少年が、珍しく助けた小さな女の子。

まだ出会って一日も経っていないが、それでもトウマは少女を、レンを護りたいと思った。

自分のせいで、彼女に苦しい選択をして欲しくはなかった。

ドクン

「っ!?!」

突然、トウマの中で何かが胎動を始めた。体全体が、ゆっくりと波打っているようだ。

「……あれ?」

次の瞬間、トウマの視界が、闇に包まれた。いつのまにか、立ちあがってもいる。しかし、自分が地面の上に立っている感触は、感じられなかった。

トウマは、辺りをぐるりと見回した。

「ここは……？」

《ここは、キミの心の中だ、トウマ……》

「えっ？」

後ろから自分とまったく同じ声が聞こえ、トウマは思わず振り向いた。

目の前に、いつからあったのだろうか、純白の両開きの『扉』がポツンと闇の中に浮かんでいた。

「……この扉……」

トウマは扉に近寄り、とりあえず扉を押してみた。しかし、扉はびくともしない。

《ムリだ。その扉は、まだ開かない。……遂に会えたな、トウマ》

再び、自分と同じ声が聞こえる。声は、扉の奥からトウマに話しかけているようだった。

「お前は……？」

《オレは、お前だ。お前の中にいる、もう一人のお前》

「もう一人の、俺……」

《そう。コインの裏表、鏡の向こう側、相似、表裏一体の存在。そして、お前に眠る『チカラ』、そのもの……》

「俺に眠る『チカラ』？」

《お前の『強固なる神』は、不完全な能力、という意味さ……》
「……なんだって？」

トウマは扉の向こう側の言葉に首をかしげた。自分の力は、あれだけじゃないのだろうか。

《今までのお前では、オレ自身をすべて引き出すことは難しい。オレたちのチカラ　『強固なる神』ヒュベリオンと『発火能力』パイロキネシスは、常に等しく死と隣り合わせにある》

「……脳への過負荷による精神および肉体の崩壊、か……」

《だからこそ、オレがこの『扉』の向こうへお前の本当の能力ごと、自らを封印した》

「……それがなんで、今更？」

トウマが尋ねると、扉の向こう側の声は小さく笑った。

《お前が『チカラ』を欲したからさ。望んだらろう？　大切なものを全てを護る『剣』になりたいと》

「……………」

《今のお前なら、必ず使いこなせると、オレは信じている。オレを欲しろ、トウマ》

「……どうすればいいんだ」

《この扉を開ける。そして、オレたちの『真の名』まことを呼ぶんだ》

「『真の名』？」

《そうだ。まずは扉を開ける。もう開くはずだろう。そしてそのとき、オレの『真の名』をお前に教えよう》

「……………」

トウマは、ゆっくりと扉に両手を当てた。そして、ゆっくりと、扉を押し開ける。

ギィイ。と音を立てながら、扉が少しずつ開き始めた。やがて、扉がすべて開ききる。目の前が一気に明るくなり、どこか達観したような表情の、もう一人の自分が姿を現した。

《よくやった、トウマ。お前は誰よりも勇敢なる戦士。

その誇りと信念を、忘れることなかれ。

「唱えよ。我が名は……」

「『サラマシ炎纏いし蜥蜴』！」

瞬間、視界が元居た検査室のものへと戻った。自分の体中からものすごい勢いで炎が溢れているのを感じる。しかし、トウマの体はそれまでいつも能力を使うときに感じていた、煮えたぎるような熱を帯びてはいなかった。

「きゃううっ！」

「きゃあっ！」

突然トウマの体から溢れ出した炎と熱波によって、ゴスロリ少女とパーカー少女が後方に吹っ飛ばされる。パーカー少女はすぐさま瞬間移動を発動して安全な場所へと降り立つが、ゴスロリ少女は勢いよく壁に叩きつけられた。炎によって、少女の服はすでにあちこちが焼け焦げている。

パーカー少女が歯軋りをしながら、ゆっくりと立ち上がったトウマを睨みつける。

「まさか、扉を開いたっていうの!?!」

「……………」

パーカー少女の問いに、トウマは答えなかった。ただ、自身の『強固なる神』と『発火能力』がうまく具合に混ざり合った、新しい能力の感触に、少なからず恐怖の念を抱いていた。

（あの野郎、何が『お前なら使いこなせる』だ。今までよりもじゃじゃ馬加減が増えてきてやがる……）

しかし、不思議とトウマは笑みを浮かべていた。

これだったのだ。自分が求めていた力は、大切なもの、すべてを守り抜く力。

「さあ、反撃の時間だ」

次の瞬間、トウマの体が瞬間移動をしたように、壁際のゴスロリ少女の横に現れた。『発火能力』によつてできた炎をブースターとして足元に発生させ、さらに『強固なる神』で強化した脚力で瞬間移動と同等の速度を出したのだ。

突然、横に現れたトウマを見て、ゴスロリ少女が身を縮ませる。

「ひいつー！」

「さあて、どうする？ 今のアンタじゃ俺を止められないぜ？」

「っ……舐めないでくださいー！」

最初は怯んだものの、すぐさま少女は手から紫電を発生させる。しかし、動きはトウマの方が速かった。

「遅いぜー！」

「きゃあうー！」

トウマはゴスロリ少女の顔のすぐ横に、強化した拳を叩きつける。ゴスロリ少女の横で、鉄筋の壁が深く陥没した。

「次は容赦しねえ。早いとこ立ち去りな。レンちゃんは渡さねえし、俺ももう捕まったりはしない」

「……あ、うぐうう……」

ゴスロリ少女は戦意を喪失し、ガクガクと大きく震えだしていた。さすがにもうこれ以上いたぶるのは可哀想だと思い、トウマは拳を

収め、炎の鎧を解除する。

しかし、

「う、うわああああっ！」

紫電を纏った少女の右手が、トウマの脇腹を掠めた。『炎纏いし蜥蜴』によって強化させていた皮膚を、僅かだが引き裂く。

「くっっ！」

トウマはゴスロリ少女と距離をとった。脇腹にかすかに鈍い痛みが走る。再び体に炎を纏い、ゴスロリ少女と対峙した。
だが、

「ストップ。そこまでだわよ」

パーカー少女が二人の間に割って入った。パーカー少女は耳に左手を当てながら、ゴスロリ少女に話しかける。

「『電磁使い』、ファウスト様から通信だわよ。『五十嵐イツキにより、戦闘員負傷。作戦失敗とみなす』だそうだわ。これ以上の戦闘は無意味。退散するだわよ」

パーカー少女は義務的にそう言うと、ゴスロリ少女のすぐ傍に瞬間移動をした。そして、トウマを見る。

「『強固なる神』、いいえ、『炎纏いし蜥蜴』さん。今日は勝利をあげるけど、今度はそうはいかないだわよ。試合に負けても、勝負に勝つのは私たちだわ」

パーカー少女はトウマにそう言い残すと、ゴスロリ少女と一緒にトウマの前から姿を消した。

トウマは能力を解除し、少女たちがいた場所を睨む。

「試合に負けても勝負には勝つ、か……」

最後にパーカー少女の言った言葉を反復しながら、トウマは能力を使った反動による強烈な眠気に襲われ、ゆっくりとその場に倒れ伏した。

2 - 5 Toma 『炎纏いし蜥蜴』（後書き）

今回は初のトウマ視点です。

物語にもありますが、トウマは主要の能力者五人の中で、唯一、『孤独』ではない人物です。

まあ、全員が全員そうだとすごく救いようのない奴らだらけになってしまうので、その防止対策？ みたいな感じなのです。

『孤独』を共有できない代わりに、少しでもみんなを支えていきたいと、考えているトウマ。

主人公のイツキそつちのけで強いのは、そんな理由だったりします。

ようは、イツキはまだまだということだったり。

次回で第二話は終わりです。

2・6 Ren 病院にて(前書き)

やっと更新できました……。

一応、これで第二話が終了です。

2 - 6 Ren 病院にて

「これは、作戦失敗だわね」

レンが『霧』の能力を解除した途端、黒いパーカーの少女とぼろぼろのゴスロリファッションの少女が、モニター室に現れた。二人は、あちこちに血が飛び散ったモニター室の惨状を見ても、特に表情を崩さなかった。

「こりや早く退散しなくちゃだわよ。あーあ、めんどくさいわ。『強固なる神』は『扉』を開いちゃうわ、『禁書目録』は奪えないわ。ついてなさ過ぎだわよ」

パーカー少女はそう言うと、ゴスロリ少女の背中を叩いた。少女は一瞬だけ体を強ばらせたが、すぐに両手を前に出す。すると、黒ずくめたちや彼らの切断された腕が、二人の少女へと近づいていった。

パーカー少女は、全員の身体が自分たちの近くに集まったのを確認すると、今度はレンに視線を移した。

「『禁書目録』、これで終わったと思わないことだわよ。私たちはまたいずれ、アンタを奪いに来てあげるわ」

パーカー少女はそれだけ言い残すと、他の黒ずくめたちを連れて、モニター室から消え去った。

あの後、ユウトが見知らぬ三人組と一緒にモニター室に駆けつけ、イツキやヒカルなどの負傷者をこの病院へと運び込んだ。

どうやら、左腕を骨折したイツキが最も重傷だったらしい。ヒカルやトウマも命に別状はないと聞いて、レンは胸を撫で下ろした。キツカはというと、ユウト以外の人間に触られるのを極端に嫌がり、まるで小さな子供に戻ってしまったかのように、ユウトの腕にしがみついて離れようとしなかった。今は一足早く、シェアハウスにユウトと二人で戻っている。

そして、レンは支援事務局に隣接する、大学附属病院の一室にいた。レンの目の前で、小さな寝息を立てているのは、イツキだ。隣では、トウマが八等分にされたリンゴを頬張っている。

「……イツキ、なかなか起きないなあ」

トウマはそう言いながら、また一つ、リンゴを頬張った。トウマは電流を浴びた以外に目立った怪我もなく、能力の使い過ぎでしばらく安静しなければいけないとのことだが、見た感じは元気そのものだった。

トウマの言葉に、レンはただ静かに頷いた。あれから、イツキはずっと眠り続けたままだ。時折、苦しそうに何かを呟いている。しかし、その声はあまりにも小さくて、うまく聞き取れなかった。レンはイツキの布団をギュッと握りしめた。

トウマが心配そうにこちらを見つめ、リンゴを差し出してくれたが、レンは丁重に断った。イツキの目が覚めるまでは、イツキが大丈夫だと実感できるまでは、何もする気にはなれなかった。

「あ、トウマっち。俺っちはリンゴ欲しいにゃー」

しかし、ベッドから乗り出してリンゴを頼張るこの男からは、何としてでもイツキを守らなければ。とは思っていた。

「うにー。レンちゃん頼つぺたブックブクー。美少女が台無しだにゃー」

そう言いながらレンの頬をつつく男は、兼村ヒロ。

話を聞く　というか、一方的に話してきた　と、彼は元々この近隣で悪さをしていた不良グループの所謂『用心棒』だったのだが、ある日地下街で仲の悪かった別のグループと抗争中に、偶然地下街に来ていたイツキの能力に全員が嫉し伏せられたのだと言う。

その後、イツキは不良たちをまとめあげ、一躍リーダーとなつて彼らを見事に更正させて、町を脅かしていた不良グループは、一転して町を綺麗にする清掃ボランティアグループになったとか。そして自分は彼のカリスマ性に惹かれ、更に能力者として虐げられた自分にココを教えてくれたイツキを愛しちゃっている……らしい。

「だから俺っち、いつきーの看病するにゃー。今ならぴかっちもいないから邪魔されないしにゃー」

ぴかっちとは、恐らくヒカルのことだろう。なるほど、イツキは結構モテモテのようだ。

(つて、私、何考えてるんだろ……)

レンは一瞬頭を過つた黒いもやもやとしたものを振り払った。イツキは自分の恩人なのだ。一度ならず、二度も自分を助けてくれた。だから、レンはイツキを看病したいのだと、自分に言い聞かせる。

コンコン。

「……？」

ドアをノックする音に、レンは顔を上げた。続けて、ドアの向こうから女の人の声が聞こえてくる。

「入っても構わないか？」

その声に反応したのは、トウマだった。

「支部長！ どうぞ入ってください」

「うむ。では、失礼するぞ」

トウマの了承を得て、ドアの向こうから妙齢の女性と筋肉質の中年男性、それにイツキと同一年くらいの少女の三人組が病室に入ってきた。確か、あの騒動の後でユウトと一緒にモニター室にやってきた人たちだ。妙齢の女性は、レンの隣まで軽やかな足取りで歩いてくると、腰を落としてレンと視線を合わせた。アップに結われたロングヘアに真っ赤なルージュがよく映えていて、とても綺麗な人だとレンは思った。

「はじめまして。私は超能力者特別支援事務局、南中央支部支部長の古賀埜という。よろしく」

妙齢の女性　古賀埜は、自己紹介をしながらレンに右手を差し出した。レンはおどおどしながらトウマを見る。トウマは声を出さずに「大丈夫だよ」と言ったので、レンはゆっくりと、自分の右手を古賀埜に差し出した。古賀埜の右手が優しくレンの右手を握る。

強気な感じの口調とは違って、古賀埜の手の感触は柔らかく、とても温かかった。

二人が手を離すと、今度は首にチョーカーを巻いた少女が、レンに手を差し出してきた。

『えっと、はじめましてですの。私は古賀埜アズリといいますの！お姉さまともども、よろしくお願ひしますですの！』

不思議なことに、アズリと名乗った少女は、口を全く開いていなかった。しかし、彼女の『声』は、確かにレンの頭に響いている。レンが面食らったように目をぱちくりと瞬かせていると、アズリは『あのあの』とまた『喋り』ながら、両手をブンブンと上下に振った。

『申し遅れましたですの。私、遠隔^{テレパス}知覚能力者なんですの。ちょっと、昔いろいろありまして、今は声が出せないんですの』

「声が……?」

そう言っつて、レンはハツと口をつぐんだ。アズリのチョーカーの端から、青黒い傷痕がほんの少しはみ出しているのが見えたからだ。おそらく、それが原因なのだろう。一瞬、病室に沈黙が走る。

「にゃはーん。でも、あずっちの能力は便利だにゃー。離れててもきちんと聞き取れるから、俺っちは好きにゃー」

そこへ、ヒロが満面の笑顔をアズリに向けた。アズリは顔を真っ赤に染めて『ありがとうございますですの』とヒロに笑顔で答えた。

「あ、それで、支部長、一体どうしたんです?」

ヒロが空気を和らげたのを察知し、直ぐ様トウマが話題を切り替える。支部長もそれを察し、うむ。と口元に手を当てながら頷いた。

「いや、『禁書目録』の能力者を保護した、と篠山から聞いてな。

「目会いたかったのだよ」

「私に……ですか？」

レンが尋ねると、古賀埜はニツコリと微笑んだ。

「ああ、君にだよ。確か、小檜山レンくん、だったかな？」

「は、はい……」

「ちよつと失礼するよ」

古賀埜はそう言うと、レンの頬に触れてきた。レンを見つめる瞳はとても深く、レンは吸い込まれそうだった。

古賀埜はしばらくの間レンを見つめていると、頬から手を離し、ゆっくりと立ち上がった。

「ありがとう。君は『合格』だ」

「へ……？」

突然、訳の分からないことを言われ、レンは戸惑った。しかし、

古賀埜はそれ以上『合格』に関して何も言わない。

「さて、第一の目的は終了だな。次の目的に移ろう」

古賀埜はそう言うと、スーツの内側からチアリーディングで使うバトンを取り出した。今度は、トウマの頭の方に移動する。

皆が黙ってその光景を見つめる中、

「この、馬鹿者が！」

「どわあっ！」

トウマの頭部に向けて、バトンを勢い良く降り下ろした。トウマは直ぐに反応して両手をクロスしてそれを受け止める。

トウマは冷や汗をかきながら苦笑いを浮かべ、古賀埜に震える声で話しかける。

「し、支部長。バトンって、凶器じゃないっすよ？」

「だからどうした？」

「いや、普通、これで人は殴らないっしょ」

「ふむ。可笑しなことを言うな。私はこの為に常にコレを持ち歩いているのだが」

「おかしいのはアンタの頭だ！」

先程の優しげな笑みとは打って変わって、妖艶に微笑む古賀埜に対し、トウマは警戒を解かない。両手はずっとクロスしてバトンを防いだままだ。二人は互いに決して引こうとしない。さすがにヒ口も驚いたのか、呆気にとられた表情で二人を見ている。

「……支部長。本題に入ってください」

数秒ほど両者が睨み合っていると、収集がつかないと判断したのか、先ほどまで口を開かなかった中年男性が、小さくため息をつきながら二人を引き離れた。

古賀埜は小さく、しかし確実に舌打ちをして、トウマから離れて近くの椅子に腰かけて足を組む。トウマはそれを確認してから、ゆっくりと両手を下ろした。服を整え、古賀埜を軽く睨みながら、トウマは尋ねる。

「……………何すか、本題って？」
「『扉』を開いたというのは本当か？」

ドクンッ

『扉』という言葉聞いた瞬間、レンの心臓が大きく脈動した。はじめて聞いたはずの言葉なのに、随分と懐かしい響きに聞こえた。

一方トウマは、古賀埜の言葉に眉を潜めていた。

「何でそのことを知ってるんですか？」

「黒いパーカーを着た少女が、そう言っていたと、モニター室の局員たちから聞いたのだ。『強固なる神』が『扉』を開いた、とな」

古賀埜がそう言うと、トウマはむう。と唸った。何かを迷っているように、考え込む。一人話を飲み込めないヒロが、おちゃらけた表情で首を傾げる。

「何の話をしてるにゃー？」

「兼村。お前は口にチャックをしている」

「……………にゃ」

古賀埜の真剣な声に、ヒロは素直に従った。そして、皆でトウマが口を開くのを待つ。トウマはまだ黙っていたが、話すことに決めたのか、慎重に言葉を紡ぎ始めた。

「俺も正確なことは分かんないです。ただ、力が欲しいと思った瞬間、突然目の前が真っ暗になって、その中に、ポツンと両開きの白い『扉』が存在していて……………」

白い、扉……。

トウマが言葉を紡ぎ出す度に、レンの脳裏に闇の中、静かに浮かぶ荘厳な白い扉の映像が現れた。どうして、こんなものが見えるのか、レンには見当もつかなかった。

なぜ？ はじめて見るのに、私はこれを、『知っている』……。

「そのとき、扉の向こうから声が聞こえました。声は、自分が俺の『真の能力』だと名乗ってました。他にも、コインの裏表とか、鏡の向こう側とかとも言っていました」

コインの裏側、鏡の向こう側……。

トウマの話を聞く度、レンの意識はどんどんと『扉』の方へと吸い込まれていく。

トウマの話を聞き終え、古賀埜は足を組み直して考える仕草をした。アズリが、先ほどとは打って変わって真剣な眼差しで自分の姉を見つめる。

『お姉さま……』

「……………」

妹の呼び掛けに、古賀埜はゆっくりと頷いた。そして、先ほどよりもずっと真剣な目付きでトウマを見据える。

「トウマ、おそらくお前が見たのは、『真名の扉』だろう」

「『真名の扉』？」

『真名の扉』……

古賀埜の声を聞いた瞬間、レンの目の前に佇む扉から、少年の声
が聞こえた。まるで、探し続けていた『何か』を遂に見つけ、歓喜
に打ち震えているようだ。

トウマが不思議そうに古賀埜の言葉を反復させると、古賀埜はア
ズリに目を向けた。

アズリはコクリと頷くと、文庫本サイズの黒い板のようなものを
取り出した。それを二つ折りに開くと、板の脇から黒いペン状の棒
を出して開いた板の内側を操作する。どうやら、携帯用パソコンの
ようだ。

アズリは少しだけパソコンをペンで操作し、手を止めてモニター
を見つめ、静かな声で話し始めた。

『……『真名の扉』、深淵に潜みしもの。』

闇に浮かび、『資格』を持ちし者を更なる高みへ導くもの。』

我、コインの裏。汝の影。汝の『真』の名。』

深淵に足を踏み入れし者よ、我が名を呼べ。さすれば我、更に深
き混沌へ汝を導かん……』

そこまで言い終えると、アズリはゆっくりとパソコンを閉じた。

『以上が、『真名の扉』についてのこちらで得られた情報ですの。
これは六百年程前に超能力者と言われていた、ヨーロッパのフレデ
リック・マーチンという方が遺した文書の一節でして、実際にある
時期を境に、彼の能力は数段上のものになったという研究結果も残
っていますの』

「……………」
「トウマ、お前が見たと言う『扉』は、他にも何か言っていないかったか？　それが『真名の扉』ならば、お前の能力には、『真』の名前があるはずだ」

古賀埜が真剣な口調でトウマに問い詰める。トウマは、古賀埜の目を見つめ返し、ゆっくりと口を開いた。

「『サラムンダー炎纏いし蜥蜴』……………」

見つけた！

その名を聞いた瞬間、レンの目の前の『扉』が、勢い良く開いた。

「……………!?!」

替わりなさい、レン。どうやら、『僕』の出番のようだ……………。

急に、少年の声が、大人びたものに変化する。それと同時に、レンの意識は『扉』の向こうに吸い込まれた。

「ふふふ……………」

レンと入れ替わった『それ』は、思わず小さく吹き出してしまった。長年探し続けていたものを、遂に見つけたのだ。やっと、やっとだった。

「レンちゃん？　どうしたんだい？」

突然レンが笑いだしたのを不思議に思ったのか、トウマが表情を崩し、レンの体を借りた『それ』に柔らかい口調で話しかけてきた。

しかし、『それ』の目を見た瞬間、トウマはサツと表情を真剣なものに戻す。それを見て、古賀埜たちも『それ』を見て先ほどよりも表情を固くする。

「あんだ……誰だ？」

「……ふむ。レンくんではないようだな」

トウマと古賀埜の言葉に、『それ』はいたく感心した。一目で見破られるとは、思っていなかったのだ。

「こんなに早くばれるなんて、思いにもありませんでした。流石は『四大元素』の一角、『炎纏いし蜥蜴』ですね。いやしかし、支部長さんも素敵な勘の持ち主だ」

『それ』はパチパチと小さく拍手をしたが、その場の空気は相変わらず固いまま変わらない。イツキはまだ眠ったままだ。

沈黙を破ったのは、古賀埜だった。

「貴様、何者だ。さっきのテロ組織の能力者か？」

古賀埜の言葉を聞いて、『それ』は肩を竦めた。どうやら、『憑^ト依能力』と勘違いされているようだ。

「違います。というか、メフィストとはどちらかというところ、逃亡者と追跡者って間柄ですね」

「……もう一度聞く。あんだ何者だ？ レンちゃんはどうしたんだ？」

『それ』を睨むトウマの目付きが、先ほどよりも鋭くなる。『そ

れ』は、うーん、と唸るように腕を組んだ。久しぶりに『体を動かしている』せいか、何だか自分でも悪ふざけをしているように見え
てしまう。

「説明すると難しいですね。簡潔に言うならば、レンは僕であり、僕はレンである、と言うのだと思います」

「……お前が、レンちゃん？」

「貴方もつい先ほど聞いたでしょう？ 『コインの裏表、鏡の向こう側』……」

それを聞いて、トウマたちは目を見開いた。『それ』は、レンの声と顔でクスリと笑う。そして、小さくお辞儀をした。やはり、芝居がかった動きに見えて、自分でも滑稽に感じてしまう。

「はじめまして。超能力者特別支援事務局、南中央支部の皆さん。僕の名前は『禁書目録』といいます」

2 - 6 Ren 病院にて（後書き）

遂にレンの能力、『禁書目録』が現れた。
果たして、レンの能力はいつたい何なのか？
そして、『禁書目録』の言った『四大元素』とは？

次回から第三話に入ります。

あと、次回から前書きにキャラクターの紹介をしていきなうとも考えております。

能力の詳しい説明（現段階での）などを書いていこうと思います。

3 - 1 T o m a 『禁書目録』(前書き)

長らくお待たせしました。今回より、後書きにキャラ紹介をしています
きます(・o・)ノ

3 - 1 Toma 『禁書目録』

「『禁書目録』……?」

自らをそう名乗った『彼』に、トウマたちは警戒を解かなかった。アズリがパソコンをギョツと抱き締める。何かあれば、すぐに『遠隔知覚』でパソコンを媒介に、アズリの『声』を病院にいる局員のパソコンや携帯に届けることができる。

すると、『禁書目録』が楽しそうに笑った。その双眸がアズリを捉え、瞳の色がどんと朱に染まっていく。

「面白いですね。電子情報を用いた『遠隔知覚』の一斉送信ですか」
「な……!?!」

行動を先読みされ、アズリの身体が硬直する。すると、それまで一歩も動かなかった渡瀬が前に進み出て、アズリを守るように、二人の前に筋骨隆々な腕を挟ませる。その双眸は、『禁書目録』と同じように朱に染まっていた。

「『アナライシス分析能力』だな」

「ええ、『ストロンガー肉体強化能力』の一種です。どうやら、貴方も同じ穴のムジナのようにですね」

「ああ。アボリオリ超能力者特別支援局、南方支部支部長補佐、わたせまさのぶ渡瀬政信という。アボリオリ先天的覚醒型の肉体強化能力者だ」

渡瀬は淡々とした口調で喋る。すると、『禁書目録』はクスリと笑った。

「先天的覚醒型は珍しいですね。大抵の方はアボステリオリ後天的覚醒型だという

の」

「……………」

「さぞかし苦勞されたでしょう。生まれながらに『異端』であることは」

「……………」

『禁書目録』は楽しそうに渡瀬に話しかけるが、渡瀬は沈黙を決め込んだように、黙っていた。それが面白くないのか、『禁書目録』は肩をすくめ、ため息をついた。

「……………寡黙な方なんですね」

「喧騒は心を惑わす。私はそう教わった。今の君は騒がしい。本来の目的から脱線しては意味がない」

「……………」

渡瀬の言葉を聞いて、『禁書目録』は驚いたように目を丸くした。それから、ゆっくりと目を閉じる。

「……………そうですね。お遊びはここまでにしましょう」

次にそう言っただけで目を開いたとき、『禁書目録』の瞳は元の澄んだ黒色に戻っていた。

「とりあえず、警戒を解いていただけませんか。僕は貴方たちと戦う気はない」

「ならば要件と君が『禁書目録』たる証を示してくれないか。私はこれでも用心深いのでね」

『禁書目録』の申し出に、古賀埜がすかさず答える。『禁書目録』は口を閉ざしたが、それも一瞬のことですぐにコクリと頷いた。

「確かに。貴方たちはそれを確かめる権利があるし、僕は貴方たちにそれを見せる義務がある」

『禁書目録』はそう言くと、ウンという音と共に、分厚い百科事典のようなハードカバーの本と羽ペンをトウマたちの目の前に出現させた。

「これは……なんですか？」

「『具現化』という能力です。『催眠能力』を応用した、ただの幻覚ではない、『触れる』幻覚を造り出す能力です」

「……アポートとは、『瞬間移動』の発展型ではないのか？」

「あなた方の言っているのは、『座標移動』という能力です。理由は分かりませんが、音無ヒカルは勘違いをしているようですね」

『禁書目録』はそこまで言くと、さて。と話を元に戻した。

「今、僕が『具現化』した、この『目録』と『羽ペン』こそが、『禁書目録』。レンに宿る力、僕の本当の姿です」

「見てみますか？」と『禁書目録』は、トウマに見えるように『目録』を動かして、ページを捲った。そこには、能力の名前が五十音順に並び、それぞれの能力の特性について細かい説明が書かれている。中には、トウマが初めて聞く能力も書かれていた。

「これが、『禁書目録』……」

古賀埜が息を呑む。その手はフルフルと震えていた。

『禁書目録』はコクリと頷くと、宙に浮かんだ羽ペンを手に取り、サラサラとページに羽ペンを走らせる。トウマの見るなかで、それ

は先ほど目にしたアズリの能力を書き留めていた。

「『目録』を所持する者が『視た』能力を『記録』し、自分のものとして『引き出す』能力。謂わば『超能力の百科事典』。それが究極の能力、『禁書目録』です」

「究極の、能力……」

トウマは息を呑む。『禁書目録』の言っていることが本当ならば、確かにこれは究極の超能力だ。しかし、それならば、『禁書目録』を所持するレンの体は……。

そんなトウマの想いを、まるで読み取ったかのように、『禁書目録』が代弁する。

「尤も、これまで僕を所持していた能力者は、例外なく若くしてその生涯を終えましたが……」

「……！」

「僕はあまりにも『異端』すぎる。本来、一人の人間が抱えきれない『悪魔』をその身に孕んでいるようなものですから」

『悪魔』

そう、『禁書目録』は自分を例えた。

確かに、超能力は危険だ。使い方一つ間違えれば、十中八九自滅する。そして、レンはあまりに大きすぎる力を持つ上に、その力の制御方法を知らない。

「だからこそ、僕はこうして現れた」

「え……？」

トウマたちはそれを聞いて、首を傾げた。一体どういふことなのか分からずにいると、『禁書目録』が話を続ける。

「僕が今、レンの身体を借りて皆さんの前に現れた理由は二つあります。一つは、レンの保護依頼です」

「……保護依頼？」

「はい。レンはまだ力を使いこなせない。僕がこつやって出てくれば、それは解消されますが、解決にはならない」

「……つまり、我々はレンくんが力を使いこなせるように手伝いをする、ということか？」

古賀埜が訊ねると、『禁書目録』はコクリと頷いた。すると、それまで黙っていたアズリが『あのあの』と口を挟む。

『し、しかし、そんなに危険な能力をどうやって使いこなすんですの？』

「確かに、レンでは僕を完全には使いこなせない。でも、『カタリスト触媒』を利用してれば、危険度は低くなるはずですよ」

「『触媒』……？」

「ええ。能力をレン本人から引き出すのではなく、実際に存在する物質を介して使用することで、能力強度を調整できれば、危険度はいくらか低く抑えられるはずですよ」

「はずって……随分と曖昧なんだな」

『禁書目録』の言葉に、トウマは不安感を抱いた。『禁書目録』は、初めての試みであるから実例がない。ある種の賭けである。と肩をすくめた。

「では、問題はその『触媒』だな。実際に存在するもので、且つ能力を介するのに適した形、か……」

古賀埜がそう言って腕を組む。トウマも『触媒』になりそうなも

のがないか、思考を巡らせた。しかし、どれもいまいちで、これだと思えるものがない。他の皆も同じようで、意見はなかなか出てこなかった。

沈黙を破ったのは、意外な声だった。

「……ケータイ」

「え？」

それまで黙っていたヒロが口を開いた。

「あずつちのパソコンみたくすればいいにや。ケータイならカメラやダウンロードで『記録』できるし、『引き出す』のだってデータフォルダを使えば楽々」

一瞬の沈黙。ヒロは何故みんなが黙っているのか分からず、首を傾げている。次の瞬間、ヒロ以外の全員が、大きなため息をついた。

「まさか、兼村に先を越されるとは……」

『ううう。お姉さま、どんまいですの〜』

「何か、すつげー悔しいな……」

「まあ、彼には悪いが……」

「ですね……」

「みんな俺つちのことバカにしすぎだにやー！」

あまりの全員の落胆のように、ヒロもさすがに憤慨する。しかし、彼の案は誰も否定はしなかった。

「携帯電話か。確かに、今どき小学生が持っていて違和感がないな」

『電子機器への能力付加なら、私が教えられるの！』

「携帯電話なら、使っていくうちに使いこなせるしな」
「……決まりですね。では、これ以降の対処はそちらでお願いします」

『禁書目録』は微笑むと、『目録』と『羽ペン』をしまった。

「では、二つ目の目的へと移りましょうか」

そう言って、『禁書目録』はトウマに向き合った。次の瞬間、霧が二人を包み込む。

「これは……？」

「『念動力能力』と『催眠能力』の合成能力、『拒絶する霧』キャンセラー・ミストです。能力者と能力者が許可したものを以外を『拒絶する』能力。長いので、僕は『鳳仙花』と呼んでいます」

「……花言葉は、『私に触らないで』……だったか？」

「おや、意外ですね」

「こっに見えて、ガードニングが趣味なんでね」

二人の間の空気が和らぐ。しかし、それも一瞬のことで、すぐに二人は真剣な表情で向き合った。

「貴方は、自分の能力について、知らないことが多い」

「……」
「……」
「『炎纏いし蜥蜴』サラマンダーは、貴方が想像している以上に、強大且つ凶悪な能力です」

「……」

トウマは黙って聞いていた。『禁書目録』は、トウマの能力につ

いて、全てを知っている。自分が言葉を挟む必要はない。そう、判断した。

『禁書目録』は、再び自身の『本体』を具現化した。パラパラとページが捲られ、真ん中を少し過ぎた辺りのページで止まる。

「念動力能力には、幾つか種類がある。それはご存知ですよね？」
「一応はな」

トウマは『禁書目録』の問いかけに頷く。トウマ自身も、その一人だ。

「では、その内、『世界を構成する』四つの元素を操る能力については？」

「世界を構成する？」

「はい。西洋魔術におけるの四大元素、さらに中国の各方位を司る四神になぞらえた、四つの能力」

『禁書目録』の言葉に合わせて、『本体』のページが一枚捲れる。そこには、彼の言う四つの能力と、見慣れぬ言葉が並んでいた。

世界に根付く、四つの要素、ファクター地・水・火・風。そして、要素を司る四種の『念動力能力』

『ソイル・マスター
土使い』
『アクア・マスター
水使い』
『パイロキ
発火能力者』
『エア・マスター
風使い』

それらの能力者の頂点に立つ八人、『しほうじん四方陣』、『エレメント四大元素』
四種の能力集いし刻、巨大な力、世界を包まん。

そこまでで、文章は終わっていた。『禁書目録』は『本』を閉じ

て『具現化』を解く。

「お分かりでしょうか。貴方が如何に強大な能力者であるかを……」
「……一つ、質問していいか？」
「どうぞ」

「頂点なのに、何で二つある？」

トウマが訊ねると、『禁書目録』は、腕を組んだ。

「確か、互いの能力が特化している部分の違いによるもののせいだったと思います。例えば、貴方の『炎纏いし蜥蜴』は一点集中攻撃特化型の能力、それに対して貴方の『裏』、『四方陣』の『朱雀』は広範囲攻撃特化型といった風に。」
「……………」

さすがに、それだけの説明ではトウマは納得できなかったが、深く突っ込むのは止めた。深く言わないということは、今はまだ言えないということなのだろう。

『禁書目録』は、話を続けた。

「僕は、『四大元素』の『真名』を持つ能力者を、ある目的の為にずっと探していました」
「ある目的？」

トウマが訊ねると、『禁書目録』はそれまでの饒舌が引っ込んでしまったように口を閉ざした。その目は、どこか悲しそうだ。
少しして、『禁書目録』はようやく口を開いた。

「……………僕の目的を、今お話することはできません。でも、『四大元

素』が全員見つかったとき、必ずお話します。だから、お願いします。どうかその時まで、僕の味方になってください」

『禁書目録』は、そうトウマに懇願した。そこには、トウマには計り知ることのできない決意が秘められているのだろ。附に落ちない点がいくつもあったが、トウマはゆっくりと頷いた。それを見て、『禁書目録』が安心したように肩を揺らした。と同時に、眠そうな表情で小さく舟を漕ぎ始める。

「どうした？」

「少し、こちらに居すぎたようです。力が出ない……」

『禁書目録』の言った通り、すぐに『拒絶する霧』が解除される。『禁書目録』が前に倒れそうになる。トウマはベッドから身を乗り出して彼を受け止めた。

「見て、いる……」

「え？」

トウマの腕の中で、『禁書目録』が小さく呟いた。トウマはもう一度耳を傾けたが、『禁書目録』はそれきり何も言わなかった。

3 - 1 T o m a 『禁書目録』（後書き）

登場人物 N O . 0 1

名前：五十嵐イツキ

性別：男

年齢：16歳（高校一年）

能力：後天的覚醒型

念動力『風使い』

遠隔念動力（媒体はスケボー）

性格：面倒くさがり

短気

特技：困って（悩んで）いる人を瞬時に見分ける

備考：一応、主人公。

何故か、老若男女関係なく好かれやすい（特に男に好かれやすい）

七年前にある理由で覚醒した。イツキの昔を知る人間はほとんどいない。ある雨の日にトウマに出会い、今に至る。

3 - 2 It s u k i 特訓開始(前書き)

今回はいつもより若干短め……かもです。

3 - 2 It s u k i 特訓開始

「ん……」

イツキは闇の中にいた。どうやら、自分は倒れているらしい。しかし、肌が何かと触れあっている感覚は無かった。まるで、宙に浮いているようだ。

『ぬしは弱いな……』

暗闇の中から、誰かがイツキに話しかけてきた。抑揚のない、低く、しかし威厳を感じられる強い声。

「……誰だ？」

『弱いぬしに名乗る名はない。我は強き者のみに我が名を名乗る』

「……随分と偉そうだな、オイ」

イツキは悪態をつきながら、起き上がろうと体に力を入れようとした。しかし、脳みそと全身との繋がりを絶たれてしまったかのように、力が入らず、起き上がることはできなかった。

『無理をするな。』器』に合わぬ』力』を使い過ぎた代償。すぐには元に戻らぬ』

「……なにを、言ってるんだ？」

『すべてはぬしの弱さが招いたこと。自分すら超えられぬ者に』力』を使いこなすことはできぬ』

「俺の弱さ……」

『まだ引き摺るか？ 己が過去の過ちを』

「……！」

声の一言に、イツキは体を強張らせた。何故、コイツはそのことを知っている？

『己が幼さと甘さを棄てぬ限り、ぬしに『力』は扱えぬ。ただ己が身を滅ぼすのみ』

「……………」

『我は再び深淵に沈む。『我』を呼ぶか、それとも『あの女』にすぎるか、ぬしが選べ』

「『あの女』……………」

声が出した『第三者』の存在に、イツキは首を傾げた。コイツの話が読めない。いったい、何を言っているのだ？

しかし、声はイツキの問いに答えようとはしなかった。段々と、声の存在が希薄になるのを感じる。

『さらばだ。ぬしはぬしの帰るべき場所へ戻れ。再び相見えしときに答えを聞こう』

「な、待て……………」

イツキは声を止めようとしたが、声はそれっきり何も言わなかった。イツキは、自分の意識が別の場所に引っ張られていくのを感じた。

「ん……」

目の前に、白いカーテンと天井が現れた。見覚えがある。確か、支援局に隣接する大学病院だったか……。

「……！」

完全に覚醒したイツキは、バツとベッドから起き上がった。途端に、左腕に鈍痛が走る。

「つつつ……」

思わず左腕を押さえる。折れた左腕は、ギプスと包帯でしっかりと固定されていた。

「……」

ゆっくりと辺りを見回すと、隣のベッドでトウマが寝息をたてていた。特に大きな怪我が無いらしく、包帯も巻いていない。イツキは安堵した。そして、自分もゆっくりと横になる。窓の外は真っ暗で、月だけが淡く輝いていた。

「己の幼さと甘さ、か……」

イツキは、夢の中の『声』の言葉を、小さく繰り返した。それと同時に思い出すのは、七年前のこと。イツキが覚醒した記憶だ。

「……ユキナ……」

イツキはそれだけ呟くと、ゆっくりと再び眠りに落ちた。その頬

には、一筋の涙が流れていた。

「……で、これはどういうことなんだ？」

翌日、イツキは支援事務局の地下にある、野球ドームを一回り小さくしたような、特別訓練室と呼ばれる場所にいた。イツキは今朝からのことを思い出す。

朝、イツキは古賀埜のボタンで叩き起こされた。そして、まだ回復しきっていないイツキとトウマを実力行使で無理矢理退院させたのだ。古賀埜曰く、

「テロリストがまた来るやもしれん。怪我は貴様らの場合は完全な自業自得、よって休息など認めんぞ！」

それから、個別に特別訓練を行うからと言って、イツキとトウマは早速支部に拉致され、何故かイツキはこの訓練室に放り込まれたのだ。

『あ、あー、ああー。おはようございます！ イツキさん、聞こえますのー？』

未だに事情の呑み込めていないイツキの耳に、どこからか聞き覚えのある声が届いた。この喋り方は、アズリだ。

「聞こえるぞー。俺は説明を求める。いったいこりやなんだ？」
『イツキさんの能力、『風使い』^{エアーマスター}を強化するのです』
「強化？」

イツキが首を傾げると、突然、イツキが放り込まれたドアから、青髪の少年が顔を出した。イツキの友人の一人、兼村ヒロだ。

「いつきー、おはー。今日も俺っちのこと、愛してるー？」
「愛してねーよ、バカヤロー」

いつもの慣れた挨拶を交わしながらも、イツキの疑問は更に膨らんだ。何故、今ここにコイツがいるんだ。
すると、再びアズリの声がドームに響き渡る。

『審査の結果、ヒロさんは『イツキさんが持っていないくて必要なもの』が分かりました。ですので、今からイツキさんには、ヒロさんと能力を使って戦ってもらいますの！』
「はあ！ 何だそりや！？」

アズリの話がイツキの理解速度を超えた。イツキが『持っていないくて必要なもの』を手に入れるために、ヒロと戦えたと？

「いつきー」
「っ！」

突然、真横からヒロの声が聞こえてきた。いつの間にか、二人の間合いが縮んでいる。

「余所見は禁物だにやー」
「……くうっ！」

咄嗟に、イツキは横に跳んだ。イツキが先ほどまでいた場所に、鋭利な氷柱が突き出している。

イツキは唾を呑んだ。

「マジかよ………!」

「にははくん、気づかれちったあ。じゃあ、コイツはどうかにや
!」

「なっ………!」

次の瞬間、ヒロの両手に氷の爪が出来た。ヒロは爪を振りかぶって、イツキに突進する。

「ちいつ!」

「にはにやにやー!」

ヒロの氷の爪が、イツキの身体ストレスの空気を引っ搔く。あれで引っ搔かれたら、ただの擦り傷ではすまなそうだ。

『あ、ちなみにイツキさん。』インヒシブル・メテオ『不可視の隕石』は使っちゃ駄目ですのー。あと、ヒロさんを傷つけずに『屈服』させること。これが、この訓練の目標ですの』

「んなんだとおっ!」

のんびりとした、あまりにも場違いなアズリの言葉に、イツキは目を丸くする。『不可視の隕石』を使わず、ヒロも傷つけずに『屈服』させる。イツキにはどうすればいいか分からない。

「いつきー、『イメージ』だにやー」

「『イメージ』?」

ヒロのアドバイスに、イツキは折れた左腕を庇って避け続けながら首を傾げる。ヒロは氷の爪の攻撃を続けながら、コクリと頷いた。「能力を使う上で一番大事なのは、能力を『イメージ』することだよ。俺っちのこの氷の爪みたいに、『形』を頭の中でイメージすることじゃー」

ヒロは氷の爪を水蒸気に戻すと、今度はバレーボール大の大きさの水球を作り出した。それを手にイツキをニヤニヤと笑いながら見ている。

「さてさて、いつきーはどれだけ耐えられるかにゃん？」

「おま、まさか……！」

ヒロの言葉を聞いて、イツキは焦った。イツキの予想は的中する。

「いつきーの頭イン俺っち特製ウォーターボール！ ゴートウヘヴーン！」

訳の分からないことを言いながら、ヒロは水球をイツキの頭に向かって思いっきり投げつけた。

「まじかよっ！」

イツキはすぐさま能力を発動する。突風がイツキの体を右にずらし、水球の狙いが逸れた。

しかし、

「いつきー、その『避け方』は不正解　俺っちの水球はホーミン

「グ機能付きにゃん」

「……っ!？」

突然クルリと旋回した水球が、後ろからイツキの頭を覆った。

イツキがヒロと闘っているのとちょうど時を同じくして、トウマは別の訓練室で渡瀬支部長補佐と対峙していた。その体には、いくつもの裂傷が刻まれている。一方、渡瀬のスーツには塵一つついていない。

「本条。お前の『炎纏いし蜥蜴』はその程度の能力なのか？」

「……ちっ！」

トウマはすぐに『バイロキネシス発火能力』を発動させる。渡瀬の右手の近くの地面から炎の柱が昇った。

だが、

「貴様の『力』はその程度ではないはずだ」

渡瀬は、右の拳を横に一閃させる。『ストロンガー肉体強化能力』で強化した拳圧が、トウマの炎柱を吹き飛ばした。

「能力はただ発動させればいいものではない。お前は今のままでは五十嵐と同じ、安全弁のない火炎放射器だ」

「……能力の、発動……？」

トウマの息は既に最高潮にまで上がっていた。昨日の疲れが癒えないままでこの戦闘訓練。限界が近かった。

「そうだ。私の能力の使い方からそれを盗め。教えるつもりは毛頭ない」

渡瀬はそう言うと、突然、トウマとの距離を詰めた。トウマの反応が遅れる。

「なっ！」

「遅い！」

渡瀬の拳が、トウマの鳩尾にめり込む。

「かはっ……！」

(能力の発動、どつすりゃいいんだよ……！)

二人の少年は、互いに似通った、しかし『自身よりも劣っているはずの』能力者によって、窮地に立たされていた。

3 - 2 It s u k i 特訓開始（後書き）

登場人物 No. 02

名前：小檜山レン

性別：女

年齢：12歳（小学六年）

能力：後天的覚醒型

究極能力『禁書目録』

どちらかというところ精神干渉系能力をよく使う。

お気に入りには『拒絶する霧』

性格：素直。怖がり。でも絶叫系は大丈夫。

実は機械オンチ（あまり使う機会がなかったため）

特技：一応裏設定では暗算だったりします（何）

備考：一応、ヒロイン。

やべえ、歳の差イツキと結構あるなあ、これって犯罪？とかと作者が若干危惧しているキャラクター。何気に主人公より話すことが多い（というか、主人公に謎が多いですねこの話）

あんまり出てこないけど、のっぽさん帽子が特徴。実はそこそこに可愛い（いらぬ設定？）

能力が覚醒する前から『メフィスト・コーポレーション』に追われる。能力の使い過ぎで疲労困憊していたときにイツキと出会い、助けられる。

連載停止のお知らせ

『ALONES』をごらんの皆様。
作者の旅がらすと申します。

長期連載停止中の本作ですが、
作者は現在、『魂の樹形図』という作品に集中し、
さらに新社会人となったことであまり多くの時間を執筆に費やせて
いないのが現状です。

そのため、本作も実に4ヶ月以上連載を怠っている有様です。
それでも本作にアクセスをしてくださっている方がいること、本当
に心より感謝の意を申し上げます。

そして、
本格的にこの『ALONES』を連載停止する旨をここでお伝えし
ます。

理由は、作者自身の推敲の無さによるものです。
きちんとした設定を骨組みとして完成させぬままに勢いで書き始め
てしまい、
現在は『この話を私はどうしたいのだろうか』と言う疑問が作者自
身の中で膨らんでいます。
アイデアはいくつかあるのですが、
どのアイデアも何かしらの矛盾を孕んでおり、
結局それすら決めずじまいでいます。

このままでは、本当にこの話を書けません。
そのため、一度連載を中止します。

もう一度、きちんと骨組みを作って、それから再び書いていこうと考えております。

再開がいつになるかは作者自身にも見当がついていません。更に、『魂の樹形図』も現在は行き詰った状態にあります。何とか時間を捻出して、書いていけるときはきちんと書いていきたいとは思っています。

我儂を言つてすみません。

必ず、もう一度イツキたちを書きます。

それは、彼らを生み出した私の義務でもあります。

最後に、本作をご愛読してくださった読者のみなさま。本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3996e/>

ALONES

2010年10月11日12時59分発行